斐川町文化財調査報告　第28集

堀切工業団地造成工事に伴う

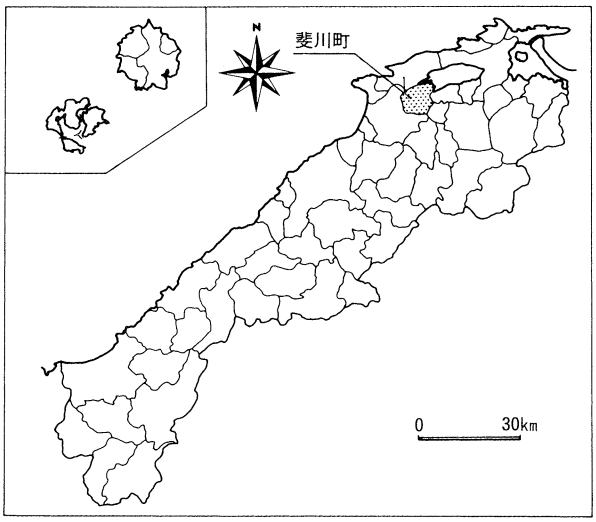
八斗蒔Ⅰ遺跡発掘調査報告書

2004年3月

斐川町教育委員会

堀切工業団地造成工事に伴う

八斗蒔Ⅰ遺跡発掘調査報告書



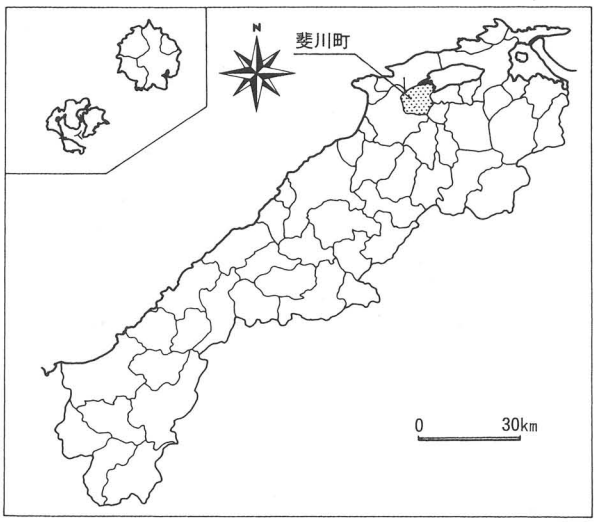
島根県斐川町の位置

2004年3月

斐川町教育委員会

堀切工業団地造成工事に伴う

八斗蒔Ⅰ遺跡発掘調査報告書



島根県斐川町の位置

2004年3月

斐川町教育委員会

序

斐川町は、宍道湖の西岸に位置し、県下最大の穀倉地帯・出雲平野と標高366mの仏経山を中心とした丘陵地帯から成り立っています。古代からの遺跡の大半は丘陵地で発見され、特に昭和59・60年に大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡は日本古代史に大きな衝撃を与えました。

これらの埋蔵文化財は、先人が残してくれた貴重な文化遺産として永く保存活用していかなければなりませんが、近年増加している開発事業に伴い、重要な遺跡が少しずつ破壊されているのが現状です。どうしても避けることができない遺跡については、発掘調査等によって記録保存を行っています。

斐川町ではこのたび町内誘致企業のための工業団地造成を行う予定で、地内にある八斗蒔Ⅰ遺跡の調査を行いました。本書には溝状遺構や道状遺構など新たな成果を収録してあります。

本書が埋蔵文化財に対する理解や歴史学習に活用されることを期待しています。

最後になりましたが、本書を発刊するにあたり地元の皆様をはじめ、関係各位の皆様のご協力に対しまして心から御礼を申し上げます。

平成16（2004）年３月

斐川町教育委員会教育長　村　上　家　次

例　　言

1．本書は、斐川町教育委員会が平成15年度に実施した堀切工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査を実施した遺跡は次のとおりである。

八斗蒔Ⅰ遺跡　島根県簸川郡斐川町大字直江町2,600番地外

3．調査組織及び期間は次のとおりである。

〔組　織〕

調査指導　島根県教育委員会

調査主体　斐川町教育委員会

事務局　陰山　昇（文化財課長）、原　賢二（文化財課主事）

調査員　宍道年弘（文化財課係長）

調査補助員　阿部賢治、大田晴美（以上、文化財課臨時職員）

遺物整理員　内田久美子（文化財課臨時職員）

〔期　間〕

平成15年４月７日～平成16年３月19日

4．現地調査及び資料整理に際しては、下記の方々にご助言、ご協力をいただいた。（順不同・敬称略）

石井　悠、内田律雄、瀬古諒子、舟木　聡、金子義明、今岡　稔、今岡利江、玉田宗達、内田　栄、石川　崇、江角　健、佐々木歩美、中村裕之、遠藤愛望

5．発掘調査にあたっては、次の方々に従事していただいた。（順不同・敬称略）

伊藤義郎、伊藤敏子、伊藤千代美、北脇チエ子、黒田倶子、頃常久夫、高根正春、玉木保郎、田村弓子、土江一雄、栂　幸夫、錦織明郎、樋野定雄、樋野富義

6．本書で使用した挿図の方位は磁北であり、レベル高は海抜である。

7．第１図は国土交通省国土地理院のものを使用した。また、自然科学分析は文化財コンサルタント㈱に作業分析を委託した。

8．本書を作製するにあたり、下記の方々から玉稿を賜った。記して謝意を表する。

八斗蒔の五輪塔について……報　文－今岡　利江（広瀬町教育委員会）
実測図－今岡　　稔、今岡　利江

八斗蒔Ⅰ遺跡発掘調査に係る花粉分析……渡辺　正巳
（文化財調査コンサルタント㈱）

9．本書の執筆は、第１、２章は宍道、第３、４章は阿部が行い、遺物実測は阿部、トレースは大田、遺物整理は内田、中村、遠藤が行った。

10．本書中で使用した土壌色は、小山正忠・竹原秀夫編著『新版標準土色帖』1988年を用いて命名した。

11．本書に報告した出土遺物、実測図、写真等は、斐川町教育委員会で保管している。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯 ……（宍道）…… 1

第２章　位置と環境 ……（宍道）…… 1

第３章　調査の概要 ……（阿部）…… 3

第１節　試掘調査の結果 …… 3
第２節　本調査の結果 …… 5
１．調査の概要 …… 5
２．遺構と出土遺物 …… 5

第４章　まとめ ……（阿部）…… 23

附編
1　八斗蒔Ｉ遺跡　昭和62年の調査　宍道　年弘 …… 35
2　八斗蒔の五輪塔について　今岡　利江 …… 40
3　八斗蒔Ｉ遺跡発掘調査に係る花粉分析　渡辺　正巳 …… 41

挿　図　目　次

第１図　八斗蒔Ｉ遺跡と周辺の主な遺跡 …… 2
第２図　試掘調査配置図 …… 3
第３図　第２トレンチ柱状図 …… 4
第４図　第３トレンチ柱状図 …… 4
第５図　八斗蒔Ｉ遺跡全体図（１：350） …… 6
第６図　SD01第１セクション断面図（１：40） …… 7
第７図　SD01第２セクション断面図（１：40） …… 7
第８図　SD01第３セクション断面図（１：40） …… 8
第９図　SD01第４セクション断面図（１：40） …… 8
第10図　SD01第５セクション断面図（１：40） …… 9
第11図　SD01第６セクション断面図（１：40） …… 9
第12図　SD01第７セクション断面図（１：40） …… 10
第13図　SD01第８セクション断面図（１：40） …… 10
第14図　SD01第９セクション断面図（１：40） …… 11
第15図　SD02遺構平面図（１：200） …… 12
第16図　SD02第１セクション断面図（１：100） …… 13
第17図　SD02第２セクション断面図（１：100） …… 13
第18図　SD02第１セクション断面図（１：50） …… 14
第19図　SD02第２セクション断面図（１：50） …… 15
第20図　SD02出土遺物実測図（１：３） …… 16
第21図　SK01実測図（１：40） …… 17
第22図　SK02実測図（１：40） …… 17
第23図　SK03実測図（１：40） …… 18
第24図　SK04実測図（１：40） …… 18
第25図　SK05実測図（１：40） …… 18
第26図　本調査の包含層遺物実測図１（１：３） …… 20
第27図　本調査の包含層遺物実測図２（１：３） …… 21
第28図　第２トレンチ出土遺物実測図（１：３） …… 19
第29図　「漆沼郷下直江村絵図」 …… 27
第30図　「島根県管内出雲国出雲郡」 …… 27
第31図　「下直江村絵図」現地比定図（１：4,000） …… 28

表　目　次

表１　遺物観察表 …… 22

写真図版目次

八斗蒔Ｉ遺跡全景（南東より）

図版１　調査前全景（北東より）
調査前近景（東より）
試掘第１トレンチ（北東より）
図版２　試掘第２トレンチ（南東より）
試掘第３トレンチ（北より）
第１トレンチ本調査遺構検出状況（南より）
図版３　第１トレンチ本調査SD01検出状況(1)
SD01検出状況(2)
SD01検出状況(3)
図版４　SD01検出状況(4)
第１トレンチ本調査完掘状況（南より）
第１トレンチ本調査SD01完掘状況(1)
図版５　SD01完掘状況(2)
SD01完掘状況(3)
SD01完掘状況(4)
図版６　第１トレンチ本調査SD01第１断面
SD01第２断面
SD01第３断面
図版７　SD01第４断面
SD01第５断面
SD01第６断面
図版８　SD01第７断面
SD01第８断面
SD01第９断面
図版９　第１トレンチ本調査SD02検出状況（南より）
第１トレンチ本調査SD02完掘状況（南より）
第１トレンチ本調査SD02第１セクション断面(1)
図版10　SD02第１セクション断面(2)
SD02第２セクション断面
第１トレンチ本調査SK01断面
図版11　SK02断面
SK03断面
SK04断面
図版12　SK05断面
五輪塔（近景）
五輪塔（正面）
図版13　第１トレンチ出土遺物(1)
第１トレンチ出土遺物(2)
図版14　第１トレンチ出土遺物(3)
第１トレンチ出土遺物(4)

第１章　調査に至る経緯

斐川町と斐川町土地開発公社は町内企業誘致のため直江町地内に新たな工業団地約1.8㌶の造成計画をたてた。公社は平成14年12月11日付けで埋蔵文化財の分布調査を斐川町教育委員会に依頼した。依頼をうけた町教育委員会は分布調査を実施し、予定地内に存在する八斗蒔（はっとまき）Ｉ遺跡の範囲確認や遺跡の性格を把握するために試掘調査を実施する必要がある旨を同年12月13日付けで公社に回答した。これを受け公社は「堀切工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財調査」の依頼を平成15年２月19日付けで行い、町教育委員会が平成15年度に発掘調査を実施することで合意した。

調査は同年４月７日から始め、まず地形に合わせ３箇所の試掘トレンチを設定し、重機と人力で発掘を行った。結果、谷水田に立地する第２及び第３トレンチは深さ２ｍ以上掘り下げたが湧水があり遺跡が存在する状況ではない一方、第１トレンチにおいては溝状の落ち込みや若干の遺物が出土したので、調査範囲を拡張して調査を行う必要があると判断した。この旨を直ちに公社に報告し協議した結果、同年５月20日付けで調査期間と経費についての変更契約を行い、継続して調査を行うこととなった。

第２章　位置と環境

八斗蒔Ｉ遺跡は出雲平野の南部、標高366ｍの仏経山から北へ派生する丘陵上に位置している。遺跡の北と東西は谷水田にはさまれ、南は標高15ｍの低丘陵が続いている。

出雲平野は近世以前は入海（古宍道湖）が広がっており、人々はおもに南部の丘陵地や谷あいで生活を営んでいたものと考えられる。斐川町内ではこれまでに240箇所以上で遺跡が確認されており、発掘調査によって次第にその様相が明らかになりつつある。

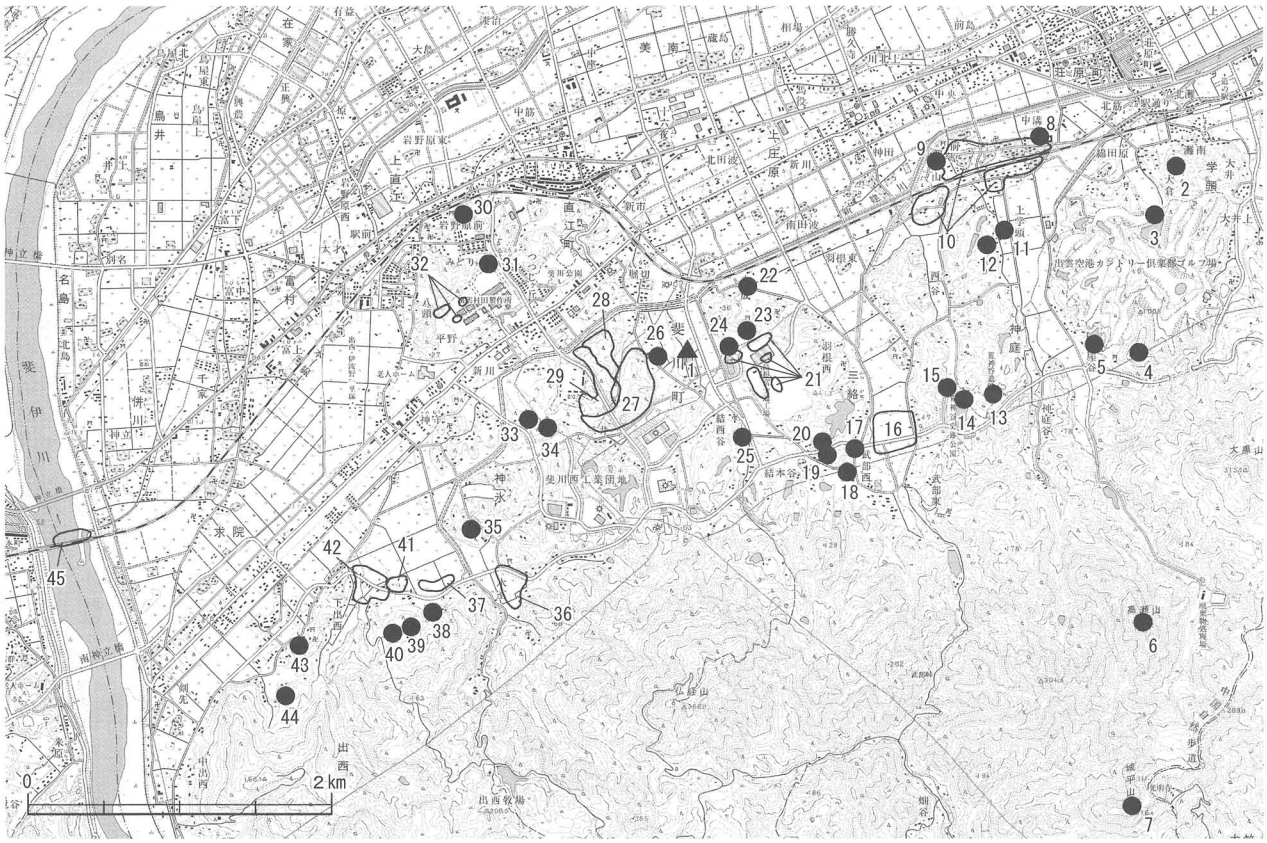
町内で今のところ最も古い遺跡としては縄文早期末～前期初頭の土器が発見された結遺跡があげられる。続いて上ケ谷遺跡からは中期末、後谷遺跡からは後晩期の土器が出土している。いずれも標高の高い丘陵地や谷あいを生活の場所にしていたことがわかる。

弥生時代に入っても生活領域はあまり変わらないが、中期中頃から集落遺跡が急激に増え、宮谷遺跡、杉沢遺跡、小野遺跡、神庭丘陵北遺跡などが知られている。358本の銅剣、６個の銅鐸、16本の銅矛が発見され全国の青銅器分布図をぬりかえた荒神谷遺跡は、製作時期は前期末から後期初め頃とみられているが、埋納時期は諸説があり新たな発見や研究の成果によるところが大きい。

古墳時代になって前期古墳は今のところ確認されていないが、中期になると神庭岩船山古墳、軍原古墳など大型の首長古墳が築かれる一方、丘陵上に結古墳群や石橋古墳群などの低墳丘をもつ古墳群や丘陵斜面では平野横穴墓群、山の奥横穴墓群などの横穴墓群が築かれるようになる。

奈良・平安時代では、近年後谷遺跡から出雲郡家に伴う施設ではないかとみられる正倉跡や隣接する稲城遺跡、小野遺跡など郡家関連遺跡が発見された。寺院関連として、小野遺跡、稲城遺跡、堀切瓦出土地からは奈良前期、天寺平廃寺からは奈良後期から平安前期の瓦類が多数出土している。とくに天寺平廃寺は「出雲国風土記」の河内郷新造院との関連で注目される。

中世においては、米原綱寛が居城していた高瀬城跡や出城に相当する大井城跡、欠ノ元城跡、大倉城跡、宇屋谷城跡、鷹の巣城跡なども重要な防御施設であったと考えられる。



1	八斗蒔Ⅰ遺跡	14	西谷遺跡	27	三井Ⅱ遺跡	40	長者原（郡家）推定地
2	大倉横穴墓群	15	西谷Ⅱ遺跡	28	杉沢Ⅲ遺跡	41	稲城遺跡
3	大倉Ⅳ遺跡	16	武部遺跡	29	杉沢Ⅰ遺跡	42	後谷遺跡
4	鷹の巣城跡	17	武部西遺跡	30	岩野原古墳群	43	出西小丸古墳群
5	宇屋谷城跡	18	武部西古墳	31	平野横穴墓群	44	山の奥横穴墓群
6	高瀬城跡	19	西古墳群	32	平野Ⅰ遺跡	45	斐伊川鉄橋遺跡
7	城平山城跡	20	石橋古墳群	33	上ケ谷遺跡		
8	神庭岩船山古墳	21	結遺跡	34	三〆田遺跡		
9	御射山横穴墓群	22	宮谷遺跡	35	城山古墳群		
10	神庭丘陵北遺跡	23	吉成古墳群	36	氷室Ⅳ遺跡		
11	小丸子山古墳	24	貴船古墳	37	小野遺跡		
12	田中古墳群	25	結城古墳	38	外ケ市古墳		
13	荒神谷遺跡	26	堀切瓦出土地	39	長者原古墳		

第１図　八斗蒔Ⅰ遺跡と周辺の主な遺跡

第３章　調査の概要

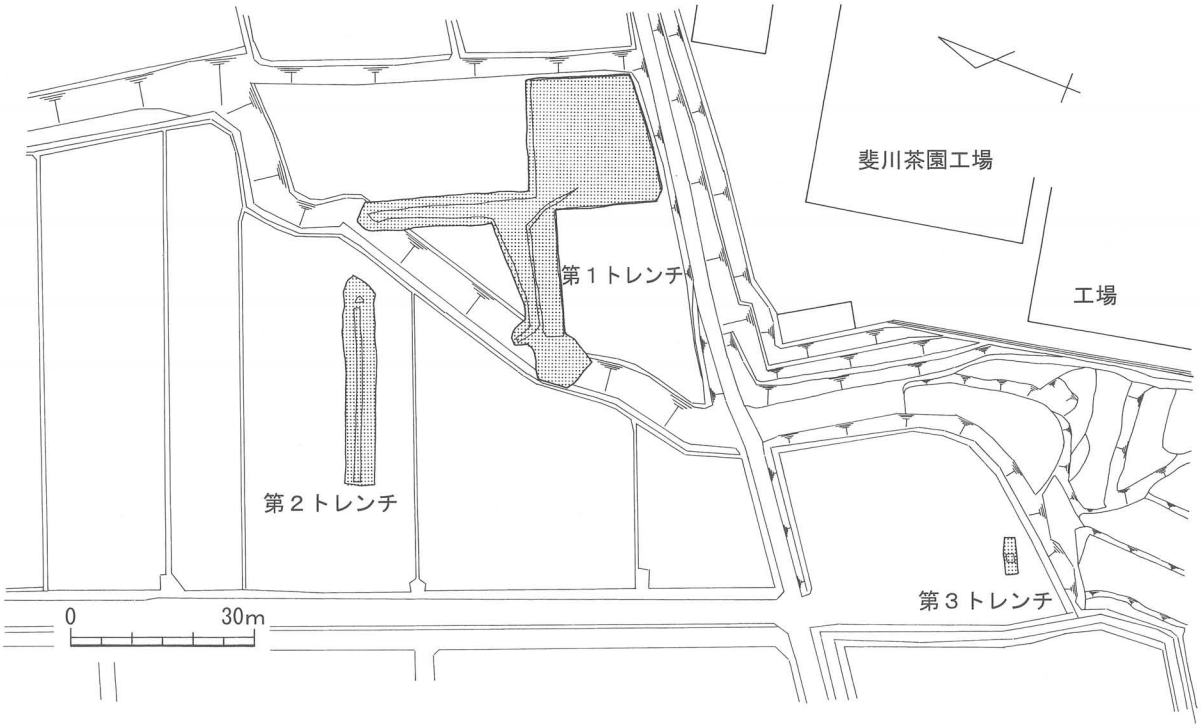
第１節　試掘調査の結果

第１トレンチ

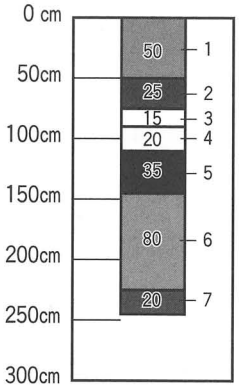
段丘上の田地に設けたトレンチである。比較的平坦地であるという当初の予想を越えて、昭和30年代の耕地整理による改変が著しいことが判明する。南西側は比較的遺構面が保たれていたが、北側は大きく削平されていて護岸ブロックが検出された。この護岸ブロックより北側は暗灰色の泥土が厚く堆積している。段丘の北側半分は、南半分を削った土砂で埋め立て造成したものであり、遺跡の分布は確認できなかった。南西側の旧丘陵上に、２本の溝跡と６基の土坑を検出している。また、南西隅に埋没谷が認められた。詳細は、第２節　本調査の結果で述べる。

第２トレンチ

幅５ｍ×長さ34ｍ、深さ2.5ｍの長方形のトレンチである。総じて軟弱な地盤であり、水が激しく湧き出る。一箇所には、溜め枡として約４ｍまで掘り下げている。耕作土を剥ぐと20㎝前後の砂層（１層）が堆積しているが、これは昭和９年の新川堤防決壊による洪水堆積層と推測される。４層（表土から1.35ｍ下）から５層（同1.7ｍ下）にかけて、腐敗した木片が厚く堆積。１層から３層にかけては近代以降の陶磁器砕片が少量出土したが、顕著な遺物包含層を確認できなかった。周辺一帯を指す「深田」という地名のとおりに、低湿地であったものと思われる。



第２図　試掘調査配置図



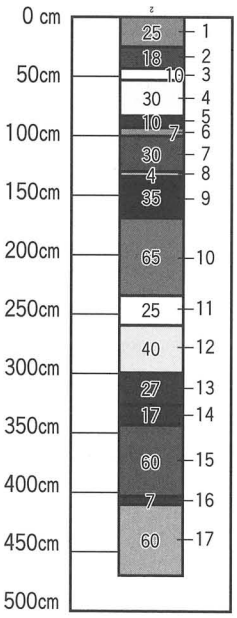
第２トレンチ土説

１層　淡黄色砂質土（2.5Y8/3）　長石φ～11㎜を主体とする層。締まり－なし　粘性－なし
２層　青灰粘質土（5BG5/1）　長石φ～８㎜微量　炭化物φ～12㎜微量　木片－微量　締まり－やや軟　粘性－あり
３層　黒色粘質土（7.5Y2/2）　木片φ～20㎜少量　粘性－軟らかい　締まり－あり
４層　木片堆積黒色土（5Y2/1）　木片が多量に堆積し、黒色土と半々で混じる層。締まり－軟らかい　粘性－あり
５層　木片堆積暗オリーブ灰色土（2.5GY4/1）　ほぼ木片の堆積で成る層　締まり－軟らかい　粘性－あり
６層　灰オリーブ色粘質土（7.5Y6/2）　木片φ～18㎜微量　白色粒子φ～８㎜微量　締まり－軟らかい粘性－あり
７層　灰褐色粘質土（7.5YR5/2）　木片φ～８㎜微量　黒色粘土BLφ～10㎜微量　灰色粘土BLφ～20㎜微量　締まり－軟らかい　粘性－あり

第３図　第２トレンチ柱状図

第３トレンチ

幅２ｍ×長さ６ｍ、深さ4.7ｍのトレンチである。周辺一帯は非常に硬く叩き締められ、湧水はなかった。上層２層(0.25ｍ～)～３層(～0.53ｍ)が砂層であり、以下は粘土層が基本となる。最下層である17層(4.1ｍ～)より、多数のシジミ貝殻片が出土した(サンプル回収)。



第３トレンチ土説

１層　にぶい赤褐色土（5YR4/4）　赤錆のような染みが前面に付着する。締まり－硬い　粘性－なし
２層　浅黄色シルト（2.5Y8/3）　締まり－硬い　粘性－なし　粒子－きめ細かい
３層　明青灰色シルト（10GB7/1）　締まり－軟らかい　粘性－なし　粒子－きめ細かい
４層　淡黄粘質土（5Y8/3）　赤錆のような染みが全面に行き渡る　締まり－なし　粘性－あり
５層　灰黄褐色粘質土（10YR5/2）　黒色粒子φ～４㎜多量　白色BLφ～15㎜多量　締まり－硬い　粘性－あり
６層　黄橙色粘質土（7.5YR7/8）　締まり－硬い　粘性－あり
７層　オリーブ灰色粘質土（10Y6/2）　締まり－硬い　粘性－あり
８層　オリーブ黄色粘質土(5Y6/4)　締まり－硬い　粘性－あり
９層　緑灰色粘質土（10G6/1）　締まり－硬い　粘性－あり
10層　黄灰色粘質土（2.5Y3/1）　締まり－硬い　粘性－あり
11層　暗緑灰砂礫（10GY4/1）　礫φ～28㎜多量　φ～７㎜多量　締まり－硬い　粘性－なし
12層　オリーブ黒色粘質土（7.5Y3/2）　締まり－硬い　粘性－あり
13層　灰オリーブ色粘質土（7.5Y6/2）　締まり－硬い　粘性－あり
14層　灰色粘質土（7.5Y5/1）　礫φ～15㎜微量　締まり－硬い　粘性－あり
15層　オリーブ灰色粘質土（5Y3/1）　締まり－硬い　粘性－あり
16層　オリーブ灰色粘質土(2.5GY5/1)　木片φ～40㎜少量　黒色粒子φ～２㎜少量　締まり－硬い　粘性－あり
17層　黒色粘質土（5Y2/1）　木片φ～40㎜少量　シジミ貝少量　締まり－硬い　粘性－あり

第４図　第３トレンチ柱状図

第２節 本調査の結果

１．調査の概要

試掘調査により、第１トレンチでは二条の溝遺構(SD01、02)と六基の土坑(SK01～06)を検出した。第２・３トレンチからは良好な遺跡は認められなかった。とくに第１トレンチで検出された二条の溝遺構はそれぞれ特徴的であったので、工業団地によって削平をうける範囲の本調査を実施した。結果、丘陵上を中心に、調査面積は約1,800㎡に広がることとなった。

２．遺構と出土遺物

SD01(第５図)

長さ120mにわたって検出された溝遺構である。調査区南西隅からＳ字状に蛇行して北東隅の調査区外へ抜ける。調査した地点は削平を受けているため平坦地となっているが、本来は丘陵地形の斜面上に位置している。当遺構は、微地形を縁取って埋没谷を迂回していた様子がうかがえる。南西側は、昭和40年代ごろに整備された棚田によってさらに削られており、ようやく底部のみが確認できる状況であったが、重機の爪痕によって、さらに南側に続くかどうかは不明である。

検出面の状態によって上幅と深さには大きさにばらつきがみられるが、残りのよい所では上幅165cm、深さ73cmを計測する。ただし、これも本来の規模を示すものではない。溝の底部はおおむね50cm幅に収まるが、第７セクション付近で80cm前後に広がる個所がある。断面は箱堀形を基本とし、砂地を開削した個所では角がとれて隅丸形を呈する。壁面と底面は平滑に仕上げられている。第２、３、５、８セクション付近では、溝底部に断続的に段がつき、第６、７、８セクション付近では、壁面の中程にも僅かに段がつくことを確認した。

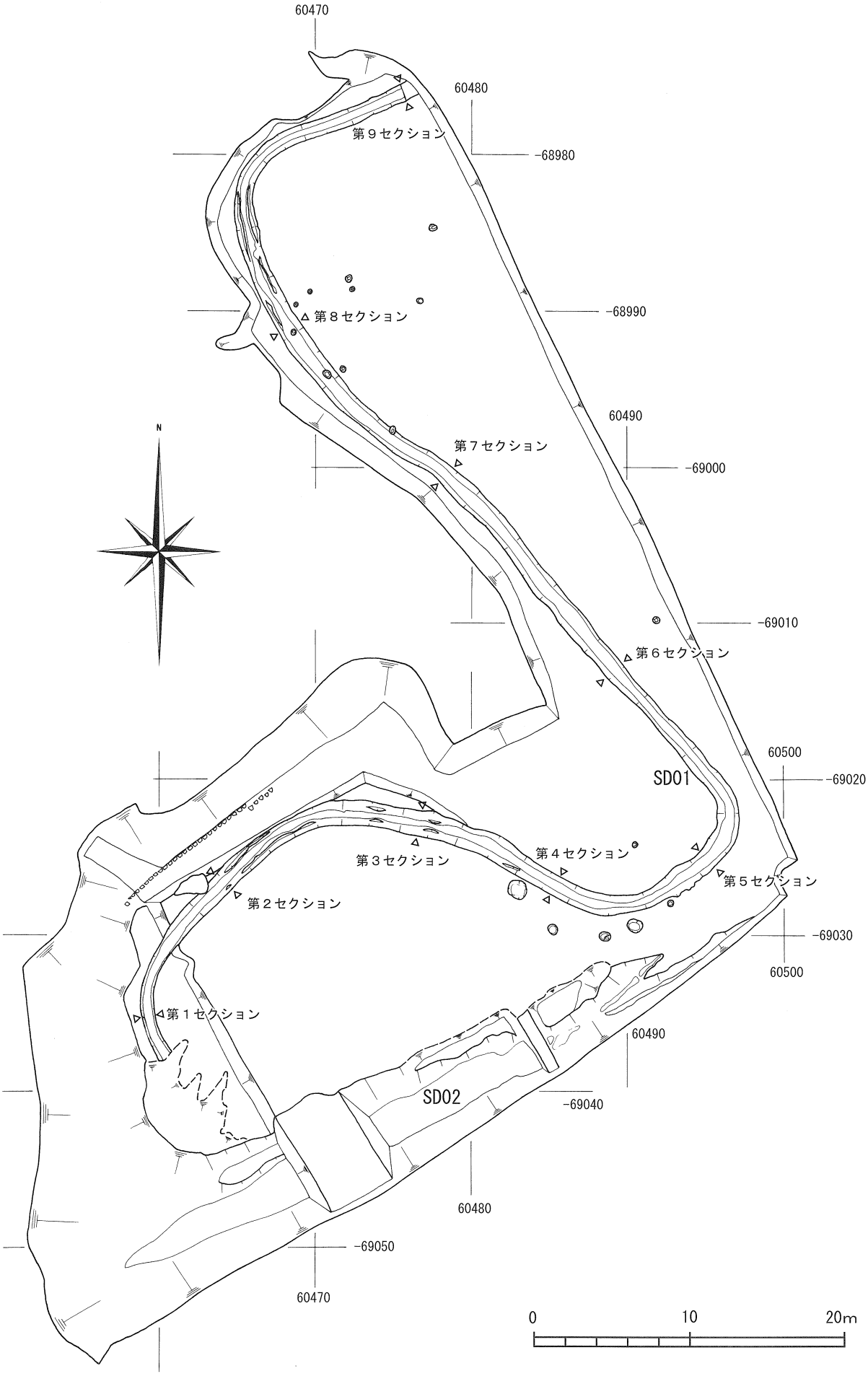
溝底部の標高は、南西隅付近が海抜６ｍ前後、埋没谷付近が海抜5.7ｍ前後、北西隅付近が海抜６ｍ前後、北東隅が海抜5.9ｍ前後となる。埋没谷付近の底部が周辺よりも30cm低くなることから、雨水や湧水が溜まる状態が続く。

切り合い関係は、SK02とPit群の一部に切られている。埋没谷の堆積を基準とすると、SK03などの土坑群よりも新しい様相を呈する。SD02との切り合い関係は攪乱によって確認できない。

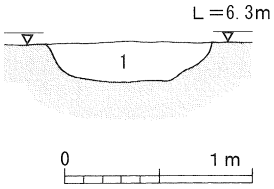
注意したにも関わらず出土遺物は皆無であった。ただし、この溝より古い埋没谷には弥生土器と須恵器砕片が認められるので、少なくとも古墳時代以降であることを指摘できる。

SD01　第１セクション

SD01の西端部分に位置し、この位置から西側に向けて大きく湾曲する。周辺はかって存在していた棚田によって、溝の大半は失われている。隅丸形を呈した溝底部のみが残存し、上幅－88cm、底辺－52cm、深さ－22cmを計測する。底部の海抜は6.04m。覆土は赤褐色土の単層である。



第５図　八斗蒔Ⅰ遺跡全体図（１：350）



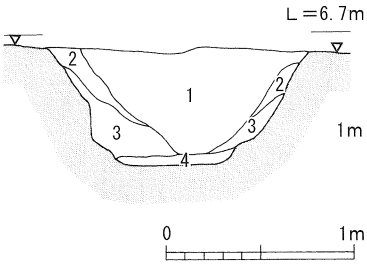
SD01　第１セクション
１層：にぶい赤褐色粘質土（5YR5/4）：浅黄橙色粘質土（10YR8/4）（7：3）灰滑粒子φ～６㎜少量　締り―極めて硬い　粘性―あり

第６図　SD01第１セクション断面図（１：40）

SD01　第２セクション

溝は北東に向けて直線に延び、長軸はＮ－79°－Ｅである。上幅－140cm、底辺－54cm、深さ－60cmを計測し、両壁に僅かな段を持つ。底部の海抜は6.00ｍ。覆土は四層に分けられ、１層はやや暗い褐色土。２層は明褐色土。３層は粒子の粗い褐色土で、丘陵側から流入した土砂とみられる。この３層下場をほぼラインとして、両壁面の段を有する。４層は灰色を帯びた褐色土で、第１セクション－１層に対応する層序である。

溝の底面には一段掘り込まれたような段を持つ。このセクション面から北東にむけて、底部には僅かな段差が続いていることが確認される。明確な切り合いは認められず、むしろ段差ラインと最下層の堆積の斉一性が指摘できるのである。

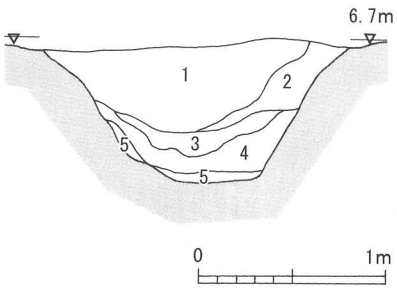


SD01　第２セクション
１層　褐灰色粘質土（7.5YR5/1）　黒色粒子φ～４㎜微量　白色粒子φ～３㎜極微量　締り―極めて硬い　粘性―あり
２層　にぶい黄橙色土（10YR7/4）　灰滑粒子φ～２㎜微量　黒色粒子φ～２㎜微量　茶色粒子φ～２㎜微量　締り―極めて硬い　粘性―あり
３層　にぶい橙色土（7.5YR6/4）　灰滑粒子φ～４㎜中量　茶色粒子φ～２㎜微量　締り―硬い　粘性―あり　粒子―粗い
４層　灰褐色粘質土（7.5YR5/2）：橙色粘質土（7.5YR7/6）（６：４）　灰滑粒子φ～４㎜少量　締り―硬い　粘性―あり

第７図　SD01第２セクション断面図（１：40）

SD01　第３セクション

溝は埋没谷地形を迂回するように湾曲し、長軸はＮ－69°－Ｗとなる。上幅－162cm、底辺－46cm、深さ－72cmを計測し、北側壁面に僅かな段差を有する。底部の海抜は、5.92ｍである。覆土は五層に分かれ、１層は極めて薄い灰色粘質土層と茶褐色土層がレンズ状に交互に折り重なった水成堆積層である。２層は茶褐色土で丘陵側からの流入である。３層は灰色粘質土である。４層は粒子が粗く、地山ブロックの堆積が認められる。５層は灰色を帯びた粘土層で、段差の位置と分層ラインはほぼ一致する。第２セクションと同様に、この周辺の底部にも段差が断続的に認められる。また溝の底面は平滑ではなく、細かな凹凸が確認できた。



SD01第３セクション
１層　明褐灰色粘質土(7.5YR7/1)：明褐灰色土(7.5YR7/2)　薄い堆積が、レンズ状に約20層程度認められる。　灰滑粒子φ～8mm少量　黒色BLφ～14mm中量　φ～10mm中量　締り―硬い　粘性―あり
２層　明褐色土(7.5YR5/6)　灰滑粒子φ～3mm少量　黒色粒子φ～5mm少量　締り―硬い　粘性―あり
３層　灰褐色粘質土(7.5YR5/2)　白色粒子φ～2mm少量　黒色粒子φ～7ｍｍ微量　締り―硬い　粘性―あり
４層　橙色土(7.5YR6/6)：淡黄色土(2.5Y8/4地山BL)（５：５）　地山BLφ～50mm×1　φ～20mm多量　白色粒子φ～7mm微量　黒色粒子φ～6mm微量　締り―硬い　粘性―あり　粒子―粗い
５層　灰黄色粘質土(2.5Y6/2)　地山BLφ～20mm中量　締り―硬い　粘性―あり

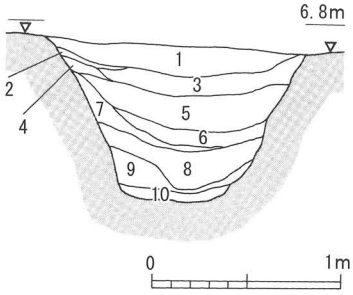
第８図　SD01第３セクション断面図（１：40）

SD01　第４セクション

この位置では、溝は埋没谷の外側を平行するようにはしり、長軸はＮ－60°－Ｗとなる。上幅－134cm、底辺－48cm、深さ－70cmを計測し、断面は箱堀となる。底部の海抜は、5.84ｍ。

覆土は十層にわかれ、１、３、５、６、８層の灰色粘土を主体とし、丘陵側から褐色土（２、４、７、９層）が若干量流入する。９層の粒子は粗い。10層は灰色粘土層で、溝底部を薄く覆うように堆積していて硬く締まっている。

この付近から湧水がはじまる。１、３、５、６層は比較的なだらかに堆積しているが、滞水期間の沈殿作用によるものか。



SD01第４セクション
１層　にぶい黄橙色土（10YR7/2）　白色粒子φ～１mm少量　黒色粒子φ～６mm少量　明褐色土が縞状に入る　締り―硬い　粘性―あり
２層　明黄褐色土（10YR6/6）　白色粒子φ～１mm微量　黒色粒子φ～１mm微量　締り―硬い　粘性―あり
３層　褐灰色土（7.5YR6/1）　炭化物φ～８mm微量　白色粒子φ～１mm微量　黒色粒子φ～２mm少量　締り―硬い　粘性―あり
４層　明黄褐色土（10YR6/6）　白色粒子φ～１mm微量　黒色粒子φ～２mm微量　締り―硬い　粘性―あり
５層　にぶい黄橙色土（10YR6/3）　褐色土と灰色粘土の薄いレンズ状の堆積が、約10層程度認められる。　地山BLφ～10mm微量　白色粒子φ～１mm微量　黒色粒子φ～３mm少量　締り―硬い　粘性―あり
６層　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　白色粒子φ～２mm微量　地山BLφ～10mm微量　締り―やや軟らかい　粘性―あり　粒子―粗い
７層　黄橙色土（10YR7/8）　白色粒子φ～４mm微量　黒色粒子φ～２mm微量　締り―硬い　粘性―あり
８層　褐灰色粘質土（10YR5/1）　茶色粒子φ～４mm微量　黒色粒子φ～３mm微量　締り―硬い　粘性―あり
９層　にぶい黄橙色土（10YR7/4）　締り―やや軟らかい　粘性―あり　粒子―粗い
10層　褐灰色粘質土（10YR5/1）　締り―極めて硬い　粘性―あり

第９図　SD01第４セクション断面図（１：40）

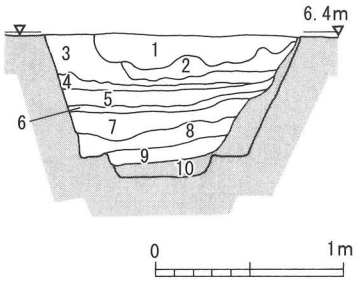
SD01　第５セクション

この位置では北東に折れ曲がって埋没谷の鞍部を横切る。よって溝は地山を開削して設けたものではなく、壁面は谷を埋め尽くした黒色土である。長軸はＮ－46°－Ｅとなる。上幅－134cm、底辺－68cm、深さ－70cmを計測し、北側の底部に一段有する。底部の海抜は、5.68ｍである。

覆土は九層にわかれ、１層は黒褐色土で埋没谷と似た色調を示す。２層は丘陵側から流れ込んだ明黄褐色土。３、４、５層の境目には、３～７mm幅の極薄い粘土層が挟まれてい

るが、浮遊した土砂の沈殿堆積によるものかもしれない。５層は褐色土と黒褐色土が混じりあった層である。６、８層は褐色土で、やや灰色がかった７層の褐色粘土層を間にはさむ。とくに８層の粒子は粗い。溝底部は一段掘り下げられているが、窪地に堆積する９層は灰色の粘土層である。10層は黒褐色の埋没谷の堆積層で、粉々となった土器や須恵器の砕片が入る。

埋没谷覆流水の通り道にあたり、この一帯の湧水は著しいものがある。また、溝底部の標高が最も低いことから排水の便がわるく、常時、水が溜まった状態となる。堆積層も基本的に沈殿堆積作用によって、比較的平らな状態である。



SD01第５セクション
１層　黒褐色土（7.5YR3/1）　白色粒子φ～２㎜極微量　炭化物φ～２㎜極微量　締り―極めて硬い　粘性―あり
２層　明黄褐色土（10YR6/6）　白色粒子φ～８㎜微量　締り―硬い　粘性―あり
３層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　白色粒子φ～４㎜微量　地山BLφ～11㎜微量　締り―硬い　粘性―あり
４層　褐灰色粘質土（10YR6/1）　地山BLφ～10㎜微量　締り―硬い　粘性―あり
５層　灰黄褐色土（10YR6/2）　地山BLφ～13㎜微量　白色粒子φ～１㎜極微量　締り―硬い　粘性―あり
６層　褐灰色粘質土（10YR6/1）　締り―硬い　粘性―あり
７層　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　灰滑粒子φ～８㎜極微量　白色BLφ～13㎜極微量　φ～８㎜極微量　締り―硬い　粘性―あり
８層　明黄褐色土（10YR7/6）　炭化物φ～６㎜極微量　白色粒子φ～４㎜微量　締り―硬い　粘性―あり
９層　褐灰色粘質土（10YR5/1）：明黄褐色土（10YR7/6）（９：１）　締り―硬い　粘性―あり
10層　黒褐色土（7.5YR3/1）　埋没谷

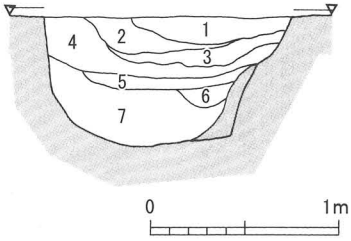
第10図　SD01第５セクション断面図（１：40）

SD01　第６セクション

埋没谷の鞍部を横断した溝は、丘陵縁を沿うように直行する。長軸はN－42°－Wとなる。

上幅－130cm、底辺－50cm、深さ－68cmを計測し、東壁の中ほどに緩い段差をもつ。遺構の断面形が、他の個所と異なって隅丸形となっているが、これは一帯の地山が砂地であり角がとれてまるくなったものと考えられる。底部の海抜は、5.68mである。

覆土は七層に分かれ、１、３、５層は灰色がかった粘土層で、あいだに褐色土である２、４層を挟んでいる。堆積状況から、丘陵側から流入した粘土層と褐色土が、交互に堆積している様子がうかがえる。６層は黒褐色土である。７層は地山ブロックを多量に含んでおり、短期間に堆積したものと考えられる。



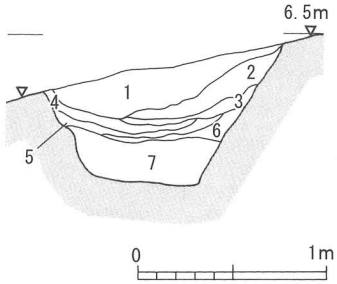
SD01第６セクション
１層　灰黄褐色土（10YR5/2）　レンズ状に薄く（～４㎜）堆積して縞目模様を呈する。白色粒子φ～２㎜極微量　締り―極めて硬い　粘性―あり
２層　にぶい黄色土（2.5Y6/4）　白色粒子φ～５㎜極微量　灰色粒子φ～８㎜中量　地山BLφ～10㎜中量　締り―極めて硬い　粘性―あり
３層　灰褐色土（7.5YR4/2）　炭化物φ～10㎜極微量　地山BLφ～13㎜少量　締り―硬い　粘性―あり
４層　明黄褐色土（10YR7/6）　白色粒子φ～６㎜極微量　地山BLφ～10㎜多量　灰滑BLφ～41㎜少量　φ～15㎜少量　締り―硬い　粘性―あり
５層　褐灰色土（10YR4/1）　地山BLφ～10㎜少量　灰滑BLφ～11㎜極少量　締り―硬い　粘性―あり
６層　黒褐色土（10YR3/1）：にぶい黄褐色土（10YR5/3）（２：８）　白色粒子φ～２㎜微量　締り―硬い　粘性―あり
７層　明褐色土（7.5YR5/6）　灰滑BLφ30～50㎜中量　φ～30㎜中量　黒色BLφ～12㎜少量　地山BLφ～40㎜少量　締り―極めて硬い　粘性―あり

第11図　SD01第６セクション断面図（１：40）

SD01　第７セクション

この辺りまで溝は直線的に掘られている。長軸はＮ－45°　－Ｗとなる。上幅－124cm、底辺－52cm、深さ－72cmを計測し、断面形は箱堀を呈する。底部の海抜は、6mである。

覆土は七層に分けられ、１層は灰色がかった暗褐色土。２、４、６層は褐色土層。３、５層は灰色がかった粘土層である。第６セクションと同様に、褐色土層と粘土層が交互に堆積する様相となる。７層は褐色土を主体に暗褐色土が混ざった状態である。



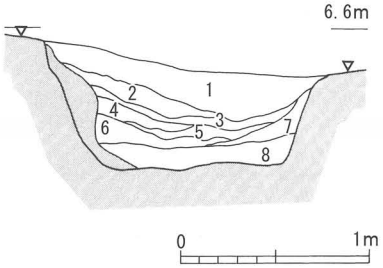
SD01第７セクション
１層　灰褐色土（7.5YR5/2）　灰滑BLφ～33mm少量　白色粒子φ～２mm微量　黒色粒子φ～２mm微量　締り―硬い　粘性―ややあり
２層　にぶい黄橙色土（10YR6/4）　灰滑粒子φ～４mm少量　白色粒子φ～２mm微量　締り―硬い　粘性―あり
３層　褐灰色土（10YR4/1）：灰黄褐色土（10YR5/2）（５：５）　灰滑粒子φ～４mm少量　締り―硬い　粘性―あり
４層　にぶい黄橙色土（10YR6/4）地山BLφ～15mm多量　灰滑粒子φ～８mm少量　炭化物φ～６mm微量　締り―硬い　粘性―あり
５層　褐灰色土（10YR5/1）　地山BLφ～10mm少量　締り―硬い　粘性―あり
６層　黄褐色土（10YR5/6）　地山BLφ～10mm多量　灰滑粒子φ～８mm中量　締り―硬い　粘性―あり
７層　にぶい褐色土（7.5YR5/4）：灰褐色土（7.5YR5/2）（８：２）　灰滑BLφ～15mm少量　締り―極めて硬い　粘性―あり

第12図　SD01第７セクション断面図（１：40）

SD01　第８セクション

溝は丘陵の地形に沿って若干西側に孤をえがく。長軸はＮ－34°　－Ｗとなる。上幅－144cm、底辺－76cm、深さ－66cmを計測し、断面は箱堀形を呈する。ほかの地点に比べて底部幅が広くなり、壁面立ち上がりの勾配が大きくなる傾向がある。底部の海抜は、5.88ｍである。

覆土は八層に分かれ、やや暗い褐色土である１、３、５層と、明るい褐色土である２、４、６、７層が、交互に折り重なるように堆積する。７層以外は、丘陵側からの流入と考えられる。８層は地山ブロックを多量に含んでおり、黒色土が若干量混ざる。比較的短期間に堆積したものと考えられるが、この層は第６セクションの最下層と似ている。



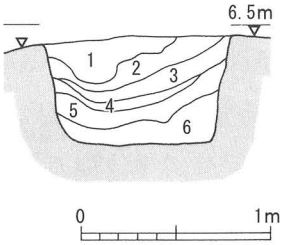
SD01　第８セクション
１層　褐灰色土（7.5YR5/1）　灰滑粒子φ～９mm微量　茶色粒子φ～２mm極微量　締り―極めて硬い　粘性―あり
２層　明黄褐色土（10YR6/6）　灰滑粒子φ～９mm少量　締り―硬い　粘性―あり
３層　灰褐色土（7.5YR5/2）　灰滑粒子φ～６mm少量　地山BLφ～10mm少量　締り―極めて硬い　粘性―あり
４層　明黄褐色土（10YR7/6）　灰滑φ～６mm中量　地山土φ～８mm多量　締り―極めて硬い　粘性―あり
５層　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　地山土φ～6mm中量　灰滑粒子φ～４mm微量　締り―硬い　粘性―あり
６層　にぶい黄橙色土（10YR6/4）：にぶい黄褐色土（10YR5/3）（７：３）　灰滑BLφ～14mm×１　φ～4mm微量　地山BLφ～20mm多量
７層　明黄褐色土（10YR6/6）　炭化物φ～２mm微量　白色粒子φ～１mm微量　締り―硬い　粘性―あり
８層　にぶい黄橙色土（10YR6/4）　地山BLφ～38mm中量　φ～20mm中量　φ～10mm多量　黒色土を若干含む　灰滑粒子φ～６mm中量　締り―硬い　粘性―あり

第13図　SD01第８セクション断面図（１：40）

SD01　第９セクション

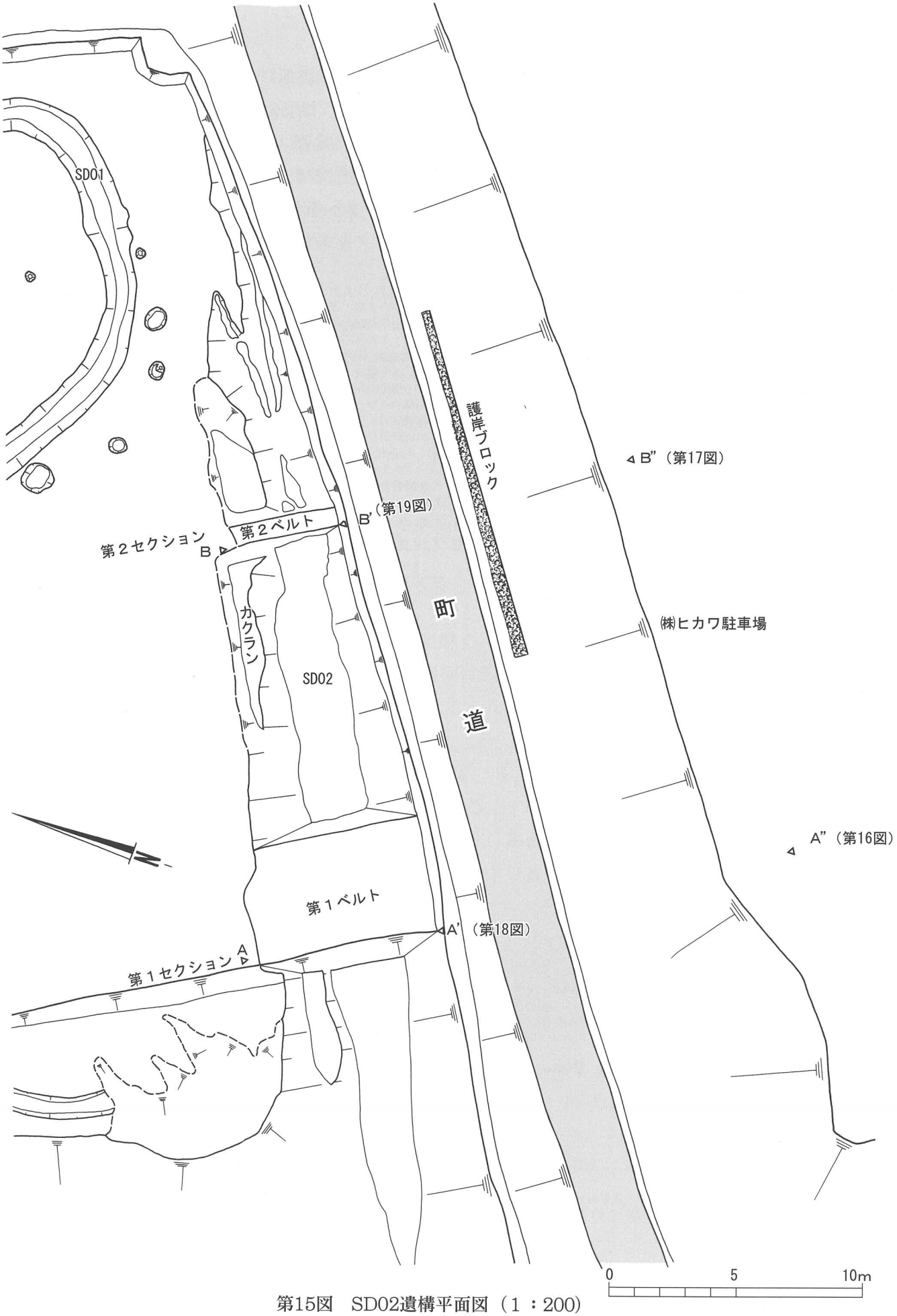
溝は丘陵縁辺にしたがって東側に折れ曲がり、調査区外に延びる。長軸はＮ－68°－Ｅとなる。上幅－98cm、底辺－58cm、深さ－58cmを計測し、断面は箱堀形を呈する。第８セクションと同様に、壁面の立ち上がりは勾配が大きい。周辺は棚田造成によって一段削られているので、見かけの掘りかたは浅くなる。底部の海抜は、5.88mである。

覆土は六層に分けられ、１層は暗褐色土である。２～５層は明るい褐色土を主体とした、丘陵側からの堆積層である。６層は地山ブロックを多量に含んでいる。



SD01　第９セクション
１層　褐灰色土（7.5YR5/1）　灰滑BLφ～12mm少量　地山土φ～６mm少量　白色粒子φ～２mm微量　締り―硬い　粘性―あり
２層　にぶい褐色土（7.5YR6/3）　白色粒子φ～６mm少量　炭化物φ～３mm少量　地山土φ～３mm少量　締り―硬い　粘性―あり
３層　にぶい橙色土（7.5YR7/4）　灰滑BLφ～18mm極微量　φ～４mm少量　黒色粒子φ～５mm少量　締り―硬い　粘性―あり
４層　灰褐色土（7.5YR5/2）：黄橙色土（7.5YR7/8）：灰白色土（7.5YR8/2）（５：３：２）　締り―硬い　粘性―あり
５層　にぶい橙色土（7.5YR7/4）　白色粒子φ～９mm少量　地山BLφ～42mm南側に少量　締り―硬い　粘性―あり
６層　灰黄褐色土（10YR4/2）：浅黄橙色土（7.5YR8/3）（５：５）　地山BLφ～220mm×１　φ～50mm中量　φ～10mm中量　灰滑BLφ～13mm少量　締り―硬い　粘性―あり

第14図　SD01第９セクション断面図（１：40）



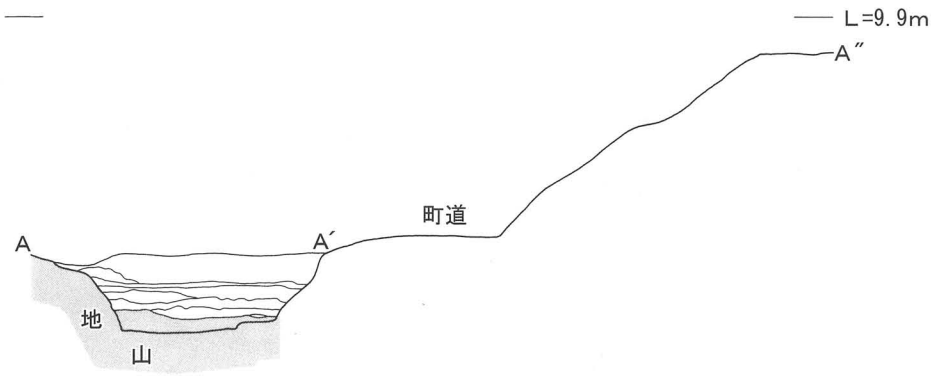
第15図　SD02遺構平面図（１：200）

SD02（第15図）

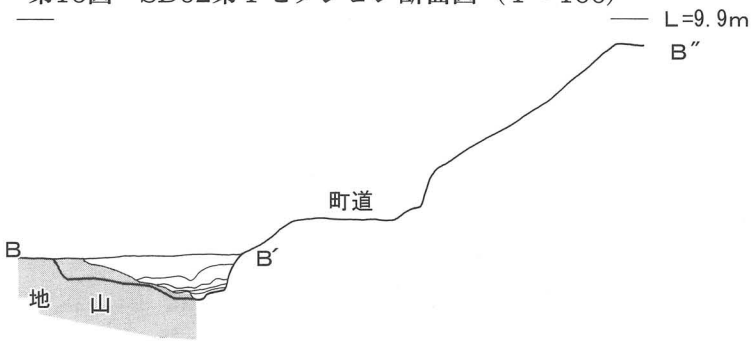
調査区南端から、部分的に検出された溝状遺構である。遺構の続きは町道の下に広がることが予想される。確認できた範囲だけで、上幅－最大７ｍ以上、底辺－３ｍを計測し、かなりな規模である。遺構は丘陵を横切るように開削される構造から、上場より底部のほうが長くなるが、底部で約40ｍを計測する。長軸は、Ｎ－63°－Ｅである。遺構底部の標高は、西端で海抜４ｍ50cm、東端で海抜６ｍ19cmとなり、東西40ｍのあいだに１ｍ70cmの比高差がある。当遺構は、西側が開放されている構造から、“切通し”の表現が相応するように思われる。第16、17図は、SD02から周辺地形を通して図化したもので、丘陵を大きく開削した様子がうかがえる。第２セクション面では側溝状のプランが確認され、東側には２条の小溝を伴っている。南側の小溝は、第２セクション図中にみえる側溝プランと繋がる可能性をもち、底幅30cmで断続的に約９ｍにわたって検出された。この小溝の長軸は、Ｎ－60°－Ｅで、SD02本体の長軸とも合致する。北側に隣接するように検出された小溝は、底幅30cmで７ｍ50cmの長さにわたって検出され、長軸は、Ｎ－51°－Ｅであった。この２本の溝の新旧関係は、第２セクションの裏側の堆積と平面プランのあり方を検討した結果、南側の小溝の方が新しいことが確認された。

SD02は数箇所にわたって攪乱を受けており、北壁その攪乱の底面が残る。堆積状況は、こうした攪乱をさけて確認した。また、調査において思いのほかに遺構が掘り下がり、町道のある法面が崩落する危険等が想定されたので、２本のベルトは町道の補強用として残すこととした。

出土遺物は、遺構底面から近代の陶磁器片（第20図２）が出土しているので、この遺構の廃絶は近代以降と考える。遺構の中位からも近代以降の遺物が出土しているが、なかでも“昭和23年の一円硬貨(第20図13)”は、昭和40年代より耕地整理が行われたという聞き



第16図　SD02第１セクション断面図（１：100）



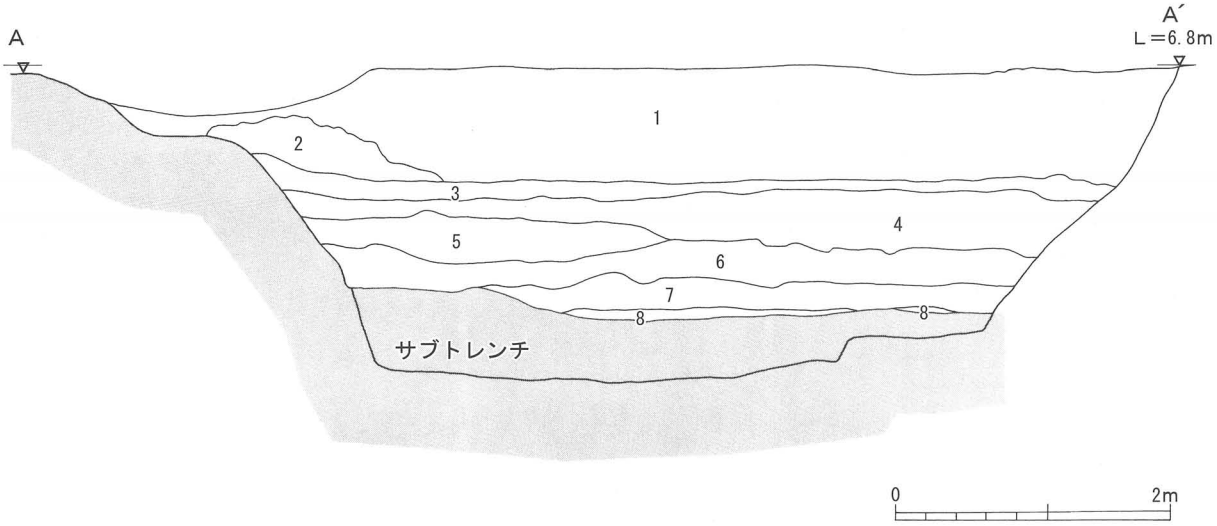
第17図　SD02第２セクション断面図（１：100）

取り内容と照合する上で参考となった。遺構を攪乱しているのは、昭和40年代の耕地整理以降の掘削に伴うものであろう。埋め立て土から須恵器砕片なども出土しているが、これらは丘陵上に存在した遺跡から混入した可能性がある。

SD02　第１セクション

今回の調査で、最も残りの状態がよい位置に設定した土層断面図である。このベルトの東側は、重機による攪乱を受けている。溝の北側壁面は認められたが、反対面は調査区外（現在は町道）となる。確認できる範囲で、上幅－720cm、底辺－300cm、深さ－166cmを計測するので、本来の規模はこれよりもさらに大きい。

覆土は八層に分かれ、１層は灰色粘土や地山ＢＬが多量に混じりあった褐色土である。２層は橙色を帯びた明褐色土。この１、２層は昭和40年代前後に行われた耕地整理の盛土層と考える。町道を越えた南側に残存する護岸ブロックも、この耕地面に沿って築いたものであることが確認できる。３層は、灰色がかった暗褐色粘土層である。ほぼ水平に全面を覆う状態で検出されたことと、聞き取りから昭和40年代以前に田地として使われた可能性がある。４、５層も、地山を削平して生じた粒子の粗い土壌を多量に含み、一気に埋め立てた土層と考える。６層は灰色がかった暗褐色土層である。７層は黒褐色土層である。セクション面にみられる段差の延長線と７層の上場ラインが一致するので、この下場面で開口していた時期があったことが考えられる。９層は地山の砂地土壌である。８層は、この地山の砂地と黒色土が混じりあった層で、硬く締まっていた。



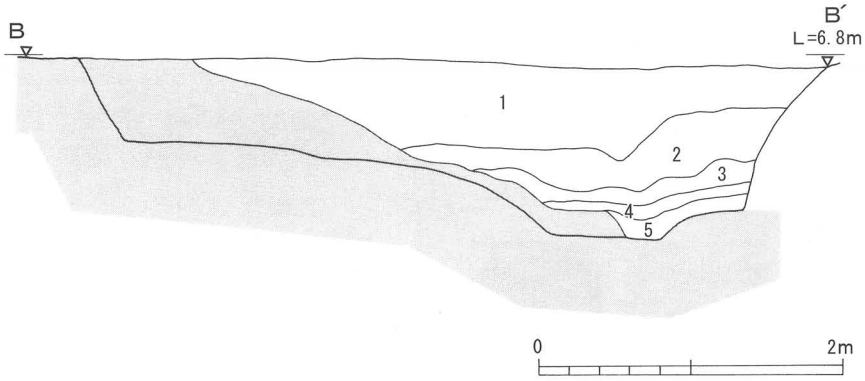
SD02第１セクション
１層　明黄褐色土（10YR6/6）：褐灰色土（10YR5/1）：淡黄色土（5Y8/3）（８：１：１）　白色BLφ～12mm少量　炭化物φ～21mm少量　締り―硬い　粘性―あり
２層　にぶい褐色土（7.5YR5/3）：褐灰色土（10YR5/1）（９：１）　長石φ～３mm微量　黄褐色BLφ～12mm微量　白色粒子φ～８mm少量　締り―硬い　粘性―あり
３層　褐灰色粘質土（10YR5/1）　長石φ～13mm中量　灰滑BLφ～13mm微量　締り―硬い　粘性―あり
４層　にぶい黄色土（2.5Y6/4）　灰滑BLφ～88mm少量　長石φ～12mm微量　炭化物φ～4mm微量　締り―軟らかい　粘性―あり
５層　にぶい褐色土（7.5YR5/3）：淡黄色土（5Y8/3）（７：３）　白色粒子φ～８mm中量　締り―軟らかい　粘性―あり
６層　褐灰色粘質土（10YR6/1）：にぶい黄橙色土（10YR7/2）：褐灰色土（10YR5/1）（８：１：１）　灰滑BLφ～26mm少量　炭化物φ～15mm少量　白色粒子φ～８mm少量　締り―非常に軟らかい　粘性―あり
７層　褐灰色粘質土（7.5YR4/1）　白色粒子φ～８mm少量　灰滑BLφ～14mm少量　炭化物φ～10mm微量　長石φ～６mm少量　締り―軟らかい　粘性―あり
８層　褐灰色土（7.5YR5/1）　長石φ～10mm多量　締り―硬い　粘性―あり
９層　灰白色砂質土（N7/）　地山

第18図　SD02第１セクション断面図（１：50）

SD02　第2セクション

第１セクションから、約16ｍほど丘陵の奥に入った位置の土層断面図である。ベルト周辺は攪乱を受けているものの、この位置での残存状態はよい。第１セクション同様に、溝の北側壁面は認められるが、南側は調査区外（町道の下）である。確認できる範囲で、上幅－400cm、底辺－220cm、深さ－96cmを計測するが、いずれも本来の大きさは不明である。遺構底部の北側には側溝らしきプランがうかがえ、上幅50cm、底辺24cm、深さ18cmを計測する。

覆土は五層に分かれ、１層は粒子の粗い褐色土であり、第１セクションの１層と対応する。２層は灰色がかった暗褐色土層で、第１セクションの６層に対応する。この層は、第１セクションでは均整のとれた堆積状況を示すが、ここでは堆積面に凹凸が生じている。南側の土層断面では、途中で段差が生じるものの、ほぼ連続することが確認される。３層は暗褐色土層である。４層は灰色粘土層、５層は黒褐色土層である。４、５層は、それぞれ第１セクションの７、８層に対応すると考えられる。５層は、黒褐色土と砂地が混じりあった層であった。周辺の地山は砂地盤と粘土岩盤から成り、側溝が確認できたのは粘土岩盤においてのみであった。ここから西側にかけて側溝の痕跡は認められなかったが、これは砂地盤に変化したことにより、残らなかったことも考えられる。



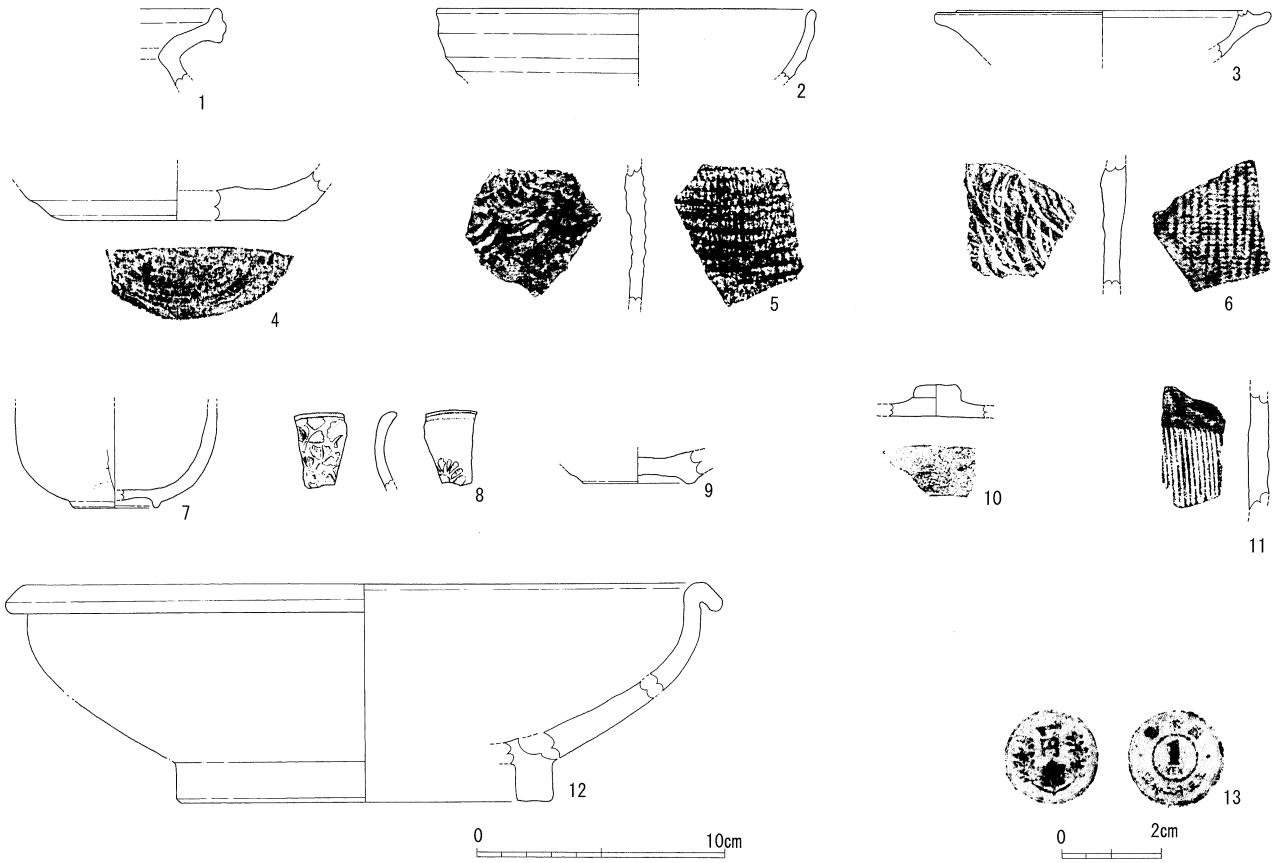
SD02第２セクション
１層　にぶい褐色土（7.5YR5/3）　灰滑BLφ60～90mm少量　φ～30mm少量　鉄分を多く含む　締り―やや硬い　粘性―あり
２層　灰黄色粘質土（2.5Y6/2）　白色粒子φ～４mm微量　長石φ～６mm微量　締り―やや硬い　粘性―あり
３層　灰褐色土（5YR5/2）　白色粒子φ～５mm少量　赤橙色粒子φ～４mm微量　締り―硬い　粘性―あり
４層　褐灰色粘質土（10YR5/1）　長石φ～４mm少量　締り―やや軟らかい　粘性―あり
５層　黒色土（10YR1.7/19　灰滑BLφ～48mm×１　長石φ～３mm少量　締り―軟らかい　粘性―あり

第19図　SD02第２セクション断面図（１：50）

SD02出土遺物

陶磁器や瓦の砕片などを中心に若干量が出土している。１は弥生時代の甕である。口縁部がくの字状に屈曲し、端部の拡張は短小で外面に２条の凹線が施される。細片のため内外面の調整は判明しがたい。弥生中期末から後期初め頃にあたると思われる。２～６は古墳時代後期以降の須恵器である。２は坏の口縁部で外面はろくろ痕が明瞭である。３は蓋坏の坏身で立ち上がり部は欠損している。４は坏の底部で外面に回転糸切り痕が認められ

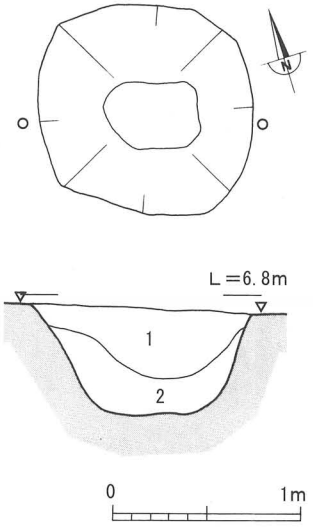
る。５・６は甕の胴部である。遺構下位の暗褐色土（１sec−６～７層）から出土した７は、半球形の染付磁器碗である。高台の断面は三角形となり、畳み付け部分は無釉。外面腰部と見込みには、呉須による絵付けが施されている。推定される産地は肥前系。焼き継ぎが行われている。遺構の底面から出土した８は、朝顔形の磁器鉢である。釉薬は科学コバルトで、内面には型紙摺りによる花散らし文様と、外面に菊花文様が描かれる。推定される年代観は近代である。遺構中位の明褐色土（１sec−４～５層）から出土した９は、陶器皿底部で、碁笥底のくり抜き高台である。胎土は褐色を呈し、灰釉が施釉される。推定される産地は肥前系唐津。遺構中位の明褐色土（1sec−４～５層）から出土した10は、陶器の土瓶蓋の丸摘みである。裏面には回転糸切り痕が残る。胎土は特徴的な赤褐色を呈し、来待釉が施釉される。指定される産地は大津窯で、幕末から明治頃にかけて生産されたものと思われる。11は、陶器擂鉢の破片である。胎土は灰色を呈し、来待釉が施釉される。推定される産地は石見焼。遺構上位の褐色土（１sec−１層）や、耕作地土中より出土した12は、内面が施釉された土器製の捏ね鉢である。砕片は一個体に帰属すると思われるが接合はできなかった。参考として復元図を作成している。胎土は橙色を呈し、内面には白泥釉が施釉される。在地窯による生産を推定する。見込み付近の内面は磨耗しており、実際に使用されたことがうかがえる。遺構中位の灰色粘土（１sec−３層）から出土した13は、昭和23年の一円硬貨である。表面全体は酸化している。



第20図　SD02出土遺物実測図（１：３）

SK01

SD01に隣接して検出された円形土坑である。上幅は、118×116cmを計測し、深さは53cmである。底部はやや楕円形（95×69cm）となる。覆土は二層に分かれ、１層は灰褐色粘質土を主体とした非常に緻密な土壌である。２層目は周辺の地山を攪拌したような色調を呈する。出土遺物なし。

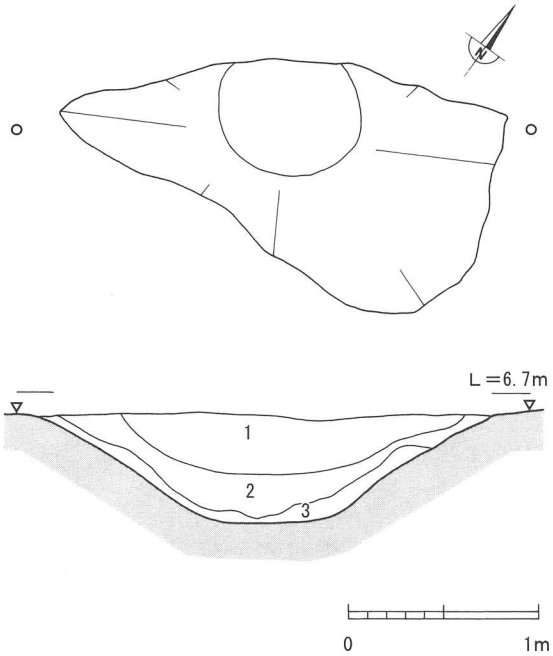


SK01セクション
１層　灰褐色粘質土（5Y5/2）　灰滑BLφ～46mm少量　φ～20mm少量　炭化物φ～10mm少量　白色BLφ～12mm少量　締り―硬い　粘性―あり
２層　灰褐色粘質土（7.5YR6/2）：明褐色粘質土（7.5YR7/2）（7：3）　灰滑BLφ～38mm少量　炭化物φ～３mm微量　地山BLφ～20mm少量　締り―硬い　粘性―あり

第21図　SK01実測図（１：40）

SK02

調査区の北西隅から検出された土坑である。北側半分を棚田の護岸工事によって失われており本来のプランは不明である。現状では円錐を半分切ったような形状となる。南西端はSD01を削平しているので、相対的に新しいことがわかる。堆積は三層に分けられ、１層は周辺の地山とよく似た明褐色土である。２層は黒色を帯びた暗褐色土。３層は地山を浸食したような色調であった。出土遺物なし。

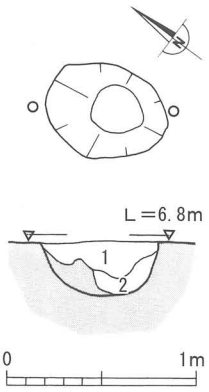


SK02セクション
１層　にぶい黄橙色土（10YR7/4）：灰黄色土（2.5Y6/2）（７：３）　灰滑粒子φ～８mm微量　炭化物φ～４mm極微量　締り―硬い　粘性―あり
２層　褐灰色土（10YR4/1）　白色粒子φ～２mm微量　締り―硬い　粘性―あり
３層　にぶい黄色土（2.5Y6/4）　灰滑BLφ～15mm極微量　φ～８mm少量　茶褐色粒子φ～２mm微量　締り―硬い　粘性―あり

第22図　SK02実測図（１：40）

SK03

上面プランは楕円形を呈する土坑で、上幅で60×72cmを計測し、深さは29cmである。長軸は、N－25°—W。底部は不定形をなしていた。覆土は二層に分かれ、１層はやや紫がかった緻密な灰褐色粘質土である。２層は灰白色の粘土層。この１層は、やや特徴的な覆土であるが、埋没谷を観察すると同じ埋土が堆積しているのが確認できる。埋没谷にはSD01の覆土も堆積しているので、両者を比較すると、SD01より相対的に古いことが推定できる。出土遺物なし。

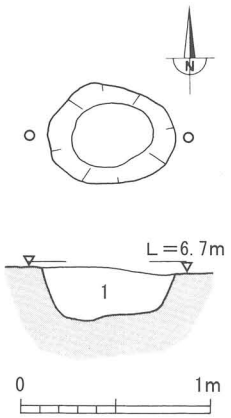


SK03セクション
１層　灰褐色粘質土（5YR6/2）　地山BLφ～41mm×１　φ～21mm中量　φ～８mm少量　炭化物φ～10mm少量　白色粒子φ～3mm少量　締り—硬い　粘性—あり
２層　灰白色粘質土（2.5Y8/2）：橙色土（5YR7/8）（９：１）　白色粒子φ～２mm少量　炭化物φ～２mm微量　締り—硬い　粘性—あり

第23図　SK03実測図（１：40）

SK04

楕円形プラン（76×57cm）の土坑で、深さは17cmである。長軸は、ほぼ東西方向となる。底部東隅には、円形の窪み（25×27cm、深さ７cm）がある。堆積する覆土は単層で、周辺の土坑群より濃い灰褐色粘土層で、非常に緻密である。他の土坑が地山に立地しているのに対して、この遺構は埋没谷の縁辺上に立地していることが影響していると考える。出土遺物なし。

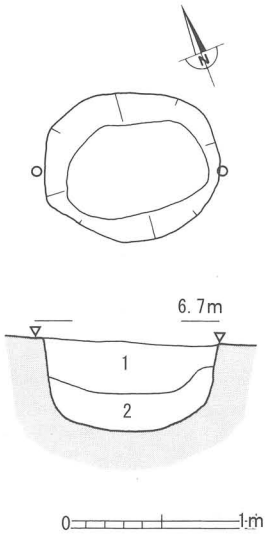


SK04セクション
１層　灰褐色土（5YR4/2）：灰褐色土（5YR5/2）（１：９）　白色粒子φ～２mm微量　茶褐色粒子φ～６mm少量　締り—硬い　粘性—あり

第24図　SK04実測図（１：40）

SK05

楕円形プラン（95×79cm）の土坑で、深さは44cmである。長軸は、N－70°—W。壁面と底面は平滑に仕上げられている。覆土は二層に分けられ、１層は、緻密な灰褐色の粘土層である。全面に鉄分を帯びた染みが認められるものの、SK02やSK03の１層と同様の土壌である。２層は１層に比べて、色濃い灰褐色粘質土であった。出土遺物なし。

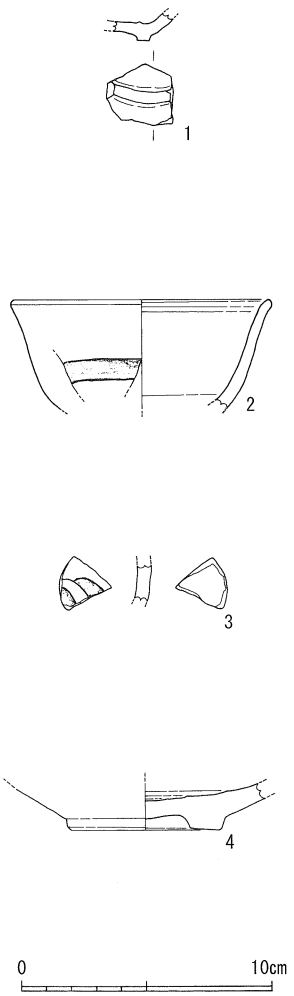


SK05セクション
１層　灰褐色粘質土（7.5YR6/2）　灰滑BLφ～56mm中量　φ～18mm中量　炭化物φ～８mm微量　締り—硬い　粘性—あり
２層　灰褐色粘質土（5YR5/2）　白色粒子φ～６mm少量　灰滑BLφ～12mm少量　炭化物φ～８mm微量　締り—硬い　粘性—あり

第25図　SK05実測図（１：40）

試掘第２トレンチ出土遺物

ト１は高台が付く須恵器の坏で、内外面は回転ナデが認められる。レンチ上位の砂層（2Tr−１）から出土した２は、端反形の染付磁器碗である。呉須の発色はわるく、くすんだ藍色である。体部外面の染付文様は不明。口唇部に二重圏線と、見込みに圏線が描かれている。器壁はやや厚ぼったく、口縁の反り具合も僅かである。端反碗のなかでも、低器高・小口径化した時代に属する。生産地としては、塩谷窯（明治４～17年操業）の製品と推定する。トレンチ上位の砂層（2Tr−１）から出土した３は、陶胎染付の砕片である。胎土は灰色を呈し、外面に呉須による染付が施される。生産地としては、18世紀前半代の肥前系平戸や波佐見の製品と推定する。暗灰色粘土層（2Tr−２）より出土した４は、陶器製の瓶・甕類や火入れの可能性が推定される。胎土は茶褐色を呈し、外面のみに灰釉が施釉される。高台は蛇ノ目高台である。推定される産地は、肥前系唐津である。

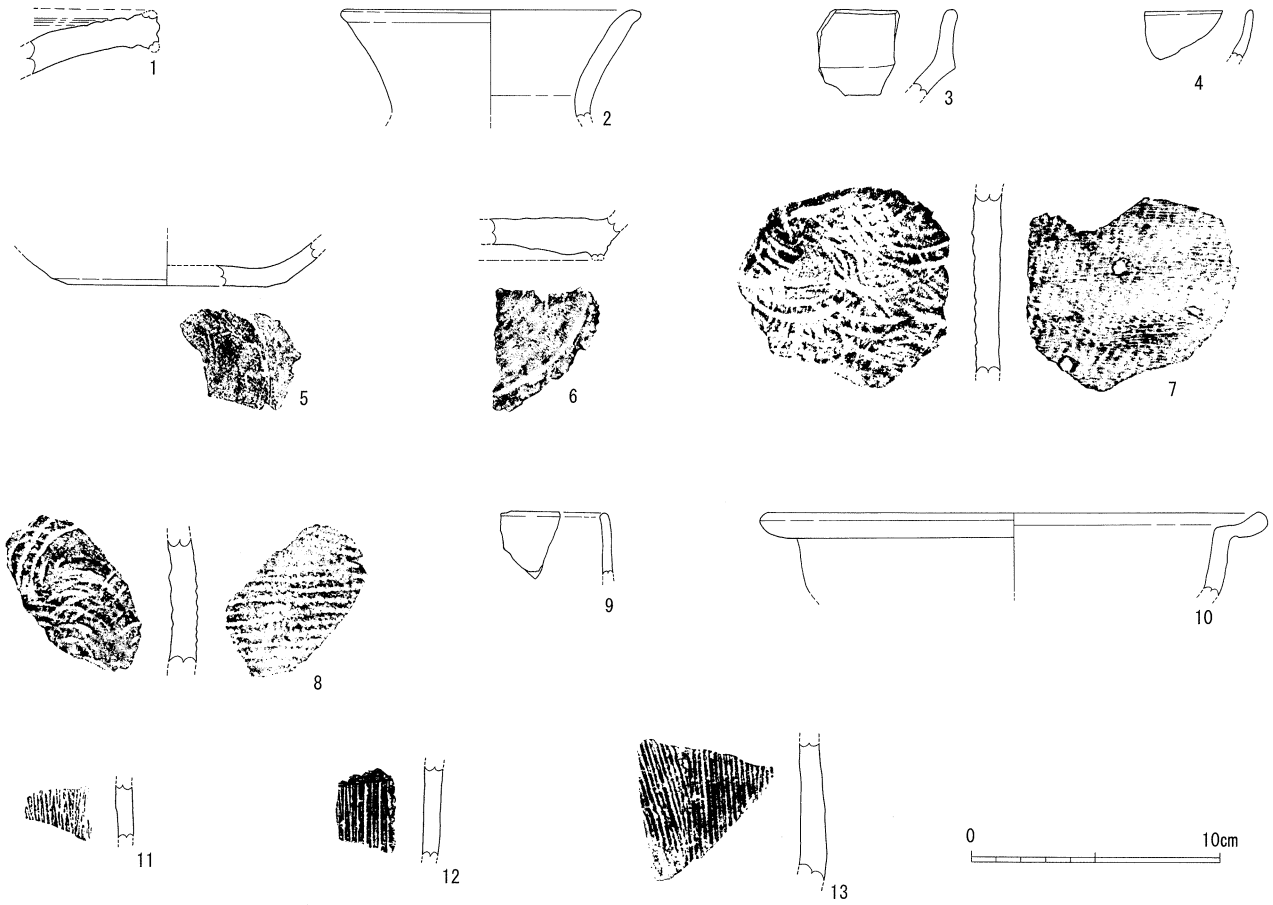


第28図　第２トレンチ出土遺物実測図（１：３）

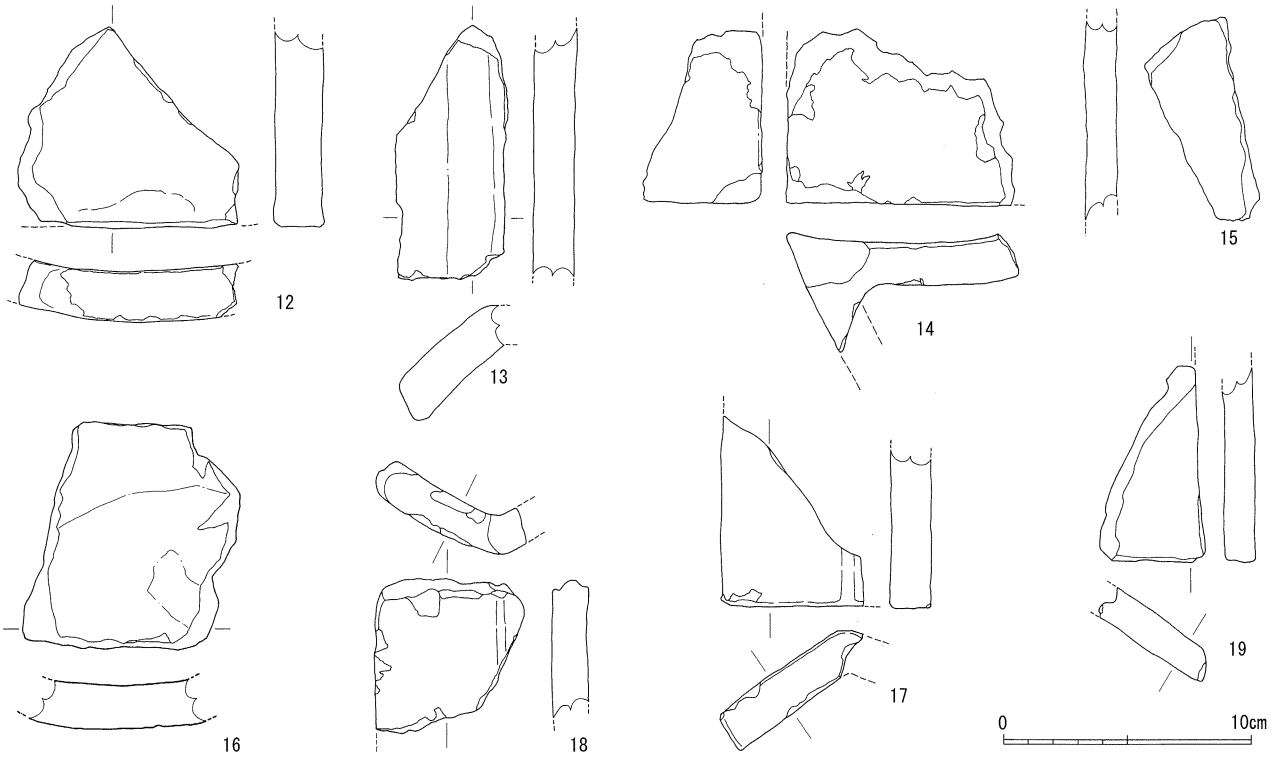
本調査の包含層遺物

これらは、遺構に伴わない遺物である。主に耕作土中より出土している。１～３は弥生時代の広口壷、長頸壷、甕である。１は大きく外傾する口縁部で、端部は短小で２条の凹線が施される。内面には３～４条の沈線が入り、頸部近くにハケメ調整が認められる。２は単純口縁で端部はさらに外傾して丸くおさまる。３は複合口縁で、口縁がやや外傾し擬凹線が施され、端部は丸くおさまるものである。弥生中期末から後期のものと思われる。４～８は奈良時代以降の須恵器である。４は坏の口縁部で端部は薄くつくられる。５は坏の底部で回転糸切り痕がかすかに認められる。６は高台がつく壷か坏底部で底部中央部の器厚が1.05cmと厚くつくられる。７・８は甕の胴部の一部である。耕作土より出土した９は、陶器碗の砕片である。胎土は灰色を呈し、緑釉が施釉される。布志名系統の窯で作られ“ボテボテ碗（出雲丸碗）”と推定する。耕作土より出土した10は、陶器製の土鍋の砕片である。胎土は赤褐色を呈し、内面には来待釉が施釉される。推定される産地は大津窯である。11～13は擂鉢の破片である。11には来待釉が施釉されるが、12と13は無施釉の土

器である。胎土は、三点ともに橙褐色を呈する。近在の窯で生産されたものと推定する。14～21は、瓦の破片である。14は無施釉、15～17は燻し瓦、18～21は赤瓦である。14は薄褐色を呈する平瓦で、還元は不十分である。表面はナデ調整が認められる。時期としては、近世以前に遡る可能性が考えられる。15と17は両面燻しで、17は表面のみの燻しである。15は桟瓦、16と17は不明。胎土は、15と16は砂粒を含んだ灰色を呈し、17は砂粒を含んだ灰褐色を呈して、雲母を微量含む。18～21は、表面に来待釉が施釉される赤瓦である。18は施釉されない露胎部分が広く、橙褐色を呈する胎土はほかの三点よりもやや耐火度が低い。19～21は硬く焼き締まっており、褐色を呈する胎土には長石などが多く含まれる。19～21は桟瓦であるが、17は桟瓦か平瓦かは不明である。聞き取り調査では、主に、大津、秋鹿、三代の瓦製品が使われていたようである。また明治から大正時代にかけては、町内の神庭焼においても瓦が生産されていたという。



第26図　本調査の包含層遺物実測図１（１：３）



第27図　本調査の包含層遺物実測図２（１：３）

試掘第２トレンチ出土遺物

表１　遺物観察表

No.	遺　構	種　別	器種	法量cm（復元） 口　径	底　径	器　厚	調　整	色　調	胎　土	焼　成	備　考
1	２トレンチ	須恵器	坏				内外面　回転ナデ	灰色	密	良好	高台あり

No.	出土位置	材質	口径cm	器高・厚さcm	底径cm（復元）	器形・形状	成　形	胎土	釉　薬	文　様	装飾	生産地	備　考
2	砂層（２Tr－１層）	磁器	(10.4)cm	/	/	端反形碗	轆轤	白色	呉須・透明釉	外　面：不明 内口縁：二重圏線 見　込：圏線	染付	塩谷焼	1870～80年代
3	砂層（２Tr－１層）	陶胎染付	/	/	/	(丸形)碗	轆轤	灰色	呉須・透明釉	外面：不明	染付	肥前系平戸・波佐見	18世紀前半頃
4	暗灰色粘土層（２Tr－２層）	陶器	/	5.83cm	/	瓶・甕類	轆轤	茶褐色	灰釉	/	/	肥前系唐津	高台内：兎巾

本調査SD02出土遺物

No.	遺　構	種　別	器種	法量cm（復元） 口　径	底　径	器　厚	調　整	色　調	胎　土	焼　成	備　考
1	SD02	弥生土器	甕				内外面　ナデ	褐色	砂粒少量	良好	
2	SD02	須恵器	坏	(15.2)			内外面　回転ナデ	暗灰色	やや密	良好	
3	SD02	須恵器	坏	(13.4)			内外面　回転ナデ	灰色	砂粒少量	良好	
4	SD02	須恵器	坏	(8.8)			内外面　回転ナデ	灰色	砂粒微量	良好	底部外面　回転糸切り痕
5	SD02	須恵器	甕				内外面　タタキ	灰色	砂粒微量	良好	
6	SD02	須恵器	甕				内外面　タタキ	内面　灰色 外面　薄紫色	密	やや不良	

No.	出土位置	材質	口径cm	器高・厚さcm	底径cm（復元）	器形・形状	成　形	胎土	釉　薬	文様	装飾	生産地	備　考
9	暗褐色土（１sec－６～７層）	磁器	/	/	(3.4)cm	半球形碗	轆轤	白色	呉須・透明釉	外面：不明 見込：不明	染付	肥前系	焼き継ぎ　18世紀末～19世紀始め
10	遺構底面	磁器	/	/	/	朝顔形鉢	轆轤	白色	科学コバルト・透明釉	外面：菊花 内面：花散らし	染付・型紙摺り絵	不明	近代
11	明褐色土（1sec－４～５層）	陶器	/	/	(4.4)cm	皿	轆轤	褐色	灰釉	/	/	肥前系唐津	高台内：縮緬
12	明褐色土（１sec－４～５層）	陶器	/	/	/	土瓶蓋	轆轤・貼り付け・回転糸切り痕	赤褐色	来待釉	/	/	大津焼	/
13	SD02土中	陶器	/	/	/	擂鉢	轆轤	灰色	来待釉	/	/	石見焼	/
14	耕作土褐色土（１sec－１層）	土器	/	/	(14.9)cm	捏鉢	轆轤	橙色	白泥釉	/	/	在地系	復元図は推定
15	灰色粘土（１sec－３層）	硬貨	1.98cm	/	0.15cm	一円貨							昭和23年

本調査出土遺物

No.	遺　構	種　別	器種	法量cm（復元） 口径	底径	器厚	調　整	色　調	胎　土	焼　成	備　考
1	１トレンチ	弥生土器	壷				内面　ハケメ	褐色	砂粒多量	良好	
2	１トレンチ	弥生土器	壷	(12)			内面　ナデ	褐色	砂粒多量	良好	
3	１トレンチ	弥生土器	甕				外面　ナデ	暗褐色	砂粒少量	良好	
4	１トレンチ	須恵器	坏	(15.4)			内外面　回転ナデ	灰色	密	良好	
5	１トレンチ	須恵器	坏		(8.0)		内外面　回転ナデ	灰色	砂粒少量	良好	底部外面　回転糸切り痕
6	１トレンチ	須恵器	坏		12.8	1.05	内外面　回転ナデ	灰色	砂粒少量	良好	高台あり
7	１トレンチ	須恵器	甕				内外面　タタキ	灰色	砂粒少量	良好	
8	１トレンチ	須恵器	甕				内外面　タタキ	灰色	砂粒少量	良好	

No.	出土位置	材質	口径cm	器高・厚さcm	底径cm（復元）	器形・形状	成　形	胎土	釉　薬	文　様	装飾	生産地	備　考
7	耕作土（１区－１層）	陶器	/	/	/	(半球形)碗	轆轤	灰色	緑釉	/	/	布志名焼	ボテボテ碗
8	耕作土（１区－１層）	陶器	(20.4)cm	/	/	土鍋	轆轤	赤褐色	来待釉	/	/	大津焼	/
9	耕作土（１区－１層）	陶器	/	/	/	擂鉢	轆轤	橙褐色	来待釉	/	/	在地系	/
10	耕作土（１区－１層）	土器	/	/	/	擂鉢	轆轤	橙褐色	/	/	/	在地系	/
11	耕作土（１区－１層）	土器	/	/	/	擂鉢	轆轤	橙褐色	/	/	/	在地系	/
12	赤褐色土（１区－２層）	瓦	/	1.8～1.9cm	/	平瓦	型打	薄褐色	/	/	/	/	/
13	耕作土（１区－１層）	瓦	/	1.7～1.8cm	/	桟瓦	型打　コビキB	灰色	/	/	両面燻し	在地系	/
14	耕作土（１区－１層）	瓦	/	1.6～1.7cm	/	不明	型打　コビキB	灰色	/	/	両面燻し	在地系	/
15	耕作土（１区－１層）	瓦	/	1.2～1.3cm	/	不明	型打	灰褐色雲母（極微量）	/	/	片面燻し	在地系	/
16	耕作土（１区－１層）	瓦	/	1.8cm	/	不明	型打	橙褐色	来待釉	/	/	在地系	/
17	耕作土（１区－１層）	瓦	/	1.6～1.8cm	/	桟瓦	型打　コビキB	灰褐色	来待釉	/	/	/	/
18	耕作土（１区－１層）	瓦	/	1.6cm	/	桟瓦	型打	薄褐色	来待釉	/	/	/	/
19	耕作土（1区-1層）	瓦	/	1.4cm	/	桟瓦	型打	褐色	来待釉	/	/	/	二次焼成

第４章　まとめ

今回の調査では、溝遺構１基（SD01）と道状遺構１基（SD02）を検出できたことが成果としてあげられる。残念なことに、両遺構とも部分的な調査にとどまり、遺構の属性を明らかにしたとは言いがたい。

当概地は、調査以前から「筑紫街道(後述)」の比定地とみなされていたが、該当遺構の可能性の高いSD02が検出された。近辺では、平成11年以来の発掘調査によって「筑紫街道」に想定される道状遺構も徐々にその姿を現しはじめている。今回の調査成果を加え、「筑紫街道」の復元作業を試みた。尚、より巨視的な「筑紫街道」の検討は、『杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡発掘調査報告書』（註１）に、三氏による論考（註２）がまとめられているので、そちらを参考にしていただきたい。

SD01について

SD01に関する調査所見を整理してみたのが下記である。

① 長さ120mにわたって検出された溝遺構で、Ｓ字状に蛇行している。

② 丘陵地形の斜面上に立地し、埋没谷を迂回しながら微地形を縁取っていた。

③ 最大、上幅165cm、深さ73cmを計測するが、本来の規模は不明。溝の底部はおおむね50cm幅であるが、一部80cm前後に広がる。

④ 断面は箱堀形を基本とし、遺構の北側にみられる段差は掘りかえしを示すものかもしれない。

⑤ 溝底部には断続的に段がつき、段差内は硬化した粘土が充填する。

⑥ 溝底部の標高は、埋没谷付近の底部が周辺よりも30cm低くなり、雨水や湧水が溜まる状態が続く。この付近の堆積状況も水成堆積の様相を示す。

⑦ 灰絶後は丘陵側からの土砂の流入によって自然堆積に近いかたちで埋没しているが、北側の底部にはブロックを多量に含む堆積がみられる。

⑧ 出土遺物はないが、埋没谷との切り合いにより古墳時代以降の開削であることが指摘できる。

SD01に関しては遺構の性格を判断する要素が乏しく用途が不明確である。以前、江戸遺跡で検出された大型溝遺構の用途分類を行ったが（註14)、その分類を参考にすると区画溝が候補の一つに挙げられる。昭和62年度の調査では、丘陵上に複数の大型建物群が検出されているので、これらに関係する区画も考えられる。他の可能性としては、用水路と道路跡の可能性も考えられる。仮に用水路とした場合、開削されたものの実際には水が流れなかった「女堀」（註15）といわれる溝渠址となったであろう。⑤で示した底部の掘り込みに粘土が充填する点に注目すると、後述する三井Ⅱ00－４区第９トレンチで検出された小溝群の構造に類似性が求められるので、道路跡としての可能性が指摘できる。村絵図に描かれる「観音寺山」を迂回する小道に相当するものかもしれない（第29図)。ただし、⑥で示したように、埋没谷付近に水が溜まる状態が続くので道としての機能が維持できた

のかには疑問が残る。ちなみに、村絵図の検討からは、当該地に寺院に比せられる宗教施設の存在をうかがわせるが、今回の調査では明確に宗教関連施設を示す事物は認められなかった。

以上、SD01に関しては、現時点で推定されるいくつかの候補を挙げることにとどめておきたい。

SD02について

SD02に関する調査所見を整理してみたのが下記である。

① 上幅－７ｍ以上、底辺－３ｍ以上を確認した道状遺構である。遺構は丘陵を横切るように開削され約40ｍ長が検出された。長軸は、Ｎ－60°－Ｅである。
② 現在の町道と重複している(遺構の南側半分は未調査)。
③ 低丘陵を越える“切通し”の構造。
④ 断片的に側溝らしきプランを２本伴っている。
⑤ 出土遺物から遺構の廃絶時期は近代以降が想定される。

SD02は現在の町道と重複しており、南側部分の調査はできなかった。部分的な調査ではあったが、確認できる範囲でも大規模な開削事業であることが判明した。第16、17図で示したように丘陵を開削した切通し状構造となるが、規模の大きさから個人的な所産でないことは明らかである。側溝らしき構造を伴っている点、後述する絵図比定作業、道路遺構としての連続性、「五輪（塔）さんや石橋地蔵の脇を、筑紫街道が通っていた」という伝承、伊治見一里塚付近の近世山陰道の構造との比較、こうした見地から同遺構は切通し構造の道状遺構ではないかと推定する。

自然科学分析の結果から溜池ではないかとの見解も提示された。これはSD02本来の機能廃絶後に一時期湿原地化したことや、もしくは隣接する湿沢（地名－‘丸池’‘フカダ’）から花粉が運ばれた可能性も指摘できるのではなかろうか。

以上、SD02に関して、現在は道状遺構と溜池遺構という可能性が挙げられている。

遺跡地周辺の景観復元

遺跡地周辺が立地する地理的環境は、地域住民の生活を成立させる基本的な要因であり、生活圏の伸張の様子は周辺の発掘調査でもあきらかになりつつある。より広い地域を理解するために、古文書、絵図、地図を用いて遺跡周辺の景観復元を行った。

遺跡地周辺をさす文字資料の初見は、『出雲国風土記』天平５年（733）にある「漆沼郷(志刀沼)」という表記である（註３）。さらに、「出雲国大税賑給歴名帳」天平11年（739）には、漆沼郷に「深江里」「上田里」「犬上里」が存在していたことを記している（註４）。「優婆塞貢進解」天平15年（744）には、「日置部君稲持、年肆拾、出雲郡漆治郷戸主出雲臣大国戸口」の名が見える（註４）。これらによって、古代では「出雲郡漆沼郷」と称されていたことがわかる。

中世に入るとこの漆治郷は近江日吉社領として、在地の鰐淵寺が雑掌として管理していたことが知られる。後に領家日吉社のもとをはなれ鰐淵寺領に編入され、以後地頭や国衙

役人などと争いながらも寺領の中核地として経営されるのである。この鰐淵寺の漆治郷領有は天文元年（1532）の塩谷興久の乱をさかいに弱体化するのであるが、この頃より漆沼郷の一地名にすぎなかった直江を冠した「直江郷」との郷名が一般的となる。これは直江の地に拠点を置いて領地経営を行ったことによるとみられる（註５）。

遺跡地周辺の地名を示した文書としては、「一　十弐俵尻　壱所山屋敷　直江之内あい次分三井村之内也、」（尼子義久袖判奉行人連署奉書　永禄５年）がある（註６）。この文章によると、この地域が「三井村」とよばれており、その一部が隣接地「羽根」に拠点をおいたとみられる羽根氏の所領となっていたことがわかる。

当遺跡地とその周辺には、「八斗蒔」や「三斗蒔」という地名があるが、『鰐淵寺文書（註７）』の「直江郷」内を示した文書のなかに、「御霊田五斗蒔」（一山三長老連署文書紛失状　永享５年）、「下散田之内　四斗蒔」（立原幸隆・本田家吉連署状　天文20年）、「三崎原五斗蒔屋敷」（尼子義久証判、立原幸隆以下三人連署奉書　永禄４年）という表現がある。これらの表現には共通して数字を冠していることから、「斗」は量（１斗＝18ℓ）を表す単位の可能性が考えられる。類似した表現として永正18年『大林寺文書（註８）』には、面積（稲種）や地名に続けて、「種足○斗○升蒔」と記される事例があり、おおむね一反（段）の作付けに対して、種足が３升～４升必要とされる割合である（註８）。こうした地名表現からの類推であるが、何らかの単位を示した表現が地名として残ったことが考えられる。現在の「八斗蒔」は丘陵地一帯を指しており、畑地と棚田（一部休耕田）の土地利用である。後述する『玉昌寺記録』では、「八斗蒔」周辺が畑地であったことが記載されている。八斗蒔の地形状況を観察すると、水田化する以前にまず畠地として開墾され、ついで可能な範囲で水田化が進められる過程が想像される（註９）。この「漆治（直江）郷」内の、「斗蒔」呼称は、おそらくは丘原や谷間地などの新開地に分布していたのではなかろうか。

先にあげた『立原幸隆・本田家吉連署状』の「下散田　四斗蒔」は、立原幸隆から鰐淵寺桜本坊へ寄進され（天文12年）、のちに桜本坊尊澄の遺言で井上坊豪円に譲られる際に、この「下散田　四斗蒔」に関しては和多坊の買い取りが確認される（同20年）。残念ながら旧「直江郷」域（伊波野・直江地区）に「下」という地名は見当たらないが「八斗蒔」丘陵の南にある家屋の屋号が「下」であり、この旧「直江郷」域に「下」という屋号はこの周辺一帯だけに確認された（平成16年３月現在３軒）。家屋は地名以上に変遷が著しいと思われるので、先にみた「斗蒔」地名の類推ともあわせて参考としてあげておく。

近世以降の史料は充分に調べられなかったが、近世以降の八斗蒔周辺を表した図化史料として以下の三点が挙げられる。

「漆沼郷下直江村絵図」文政６年（1823）　第29図

「島根管内出雲国出雲郡（島根県立図書館蔵）」明治12年（1879）　第30図

「今市」二万五千分一地形図　大正４年（1915）

このなかから、とくに「漆沼郷下直江村絵図（以下、村絵図）」は、この地域を彩色を用いて詳細に描かれている。この村絵図を現在の地形図に比定し、さらに、周辺の遺跡地図と、聞き取り地名と現在の屋号を加えたものが第31図である。現地比定は、踏査および聞

き取り調査（註10）によって地形図に落としている。

近世文書として、近在の潤徳山玉昌寺(臨済宗)が所蔵する『出雲郡下直江村潤徳山玉昌寺記録(以下、玉昌寺記録　註11)』宝暦14年（1764）によって当概地の様相をうかがい知ることができた。これは松江の天倫寺に提出するために作成された当寺の縁起文書である。

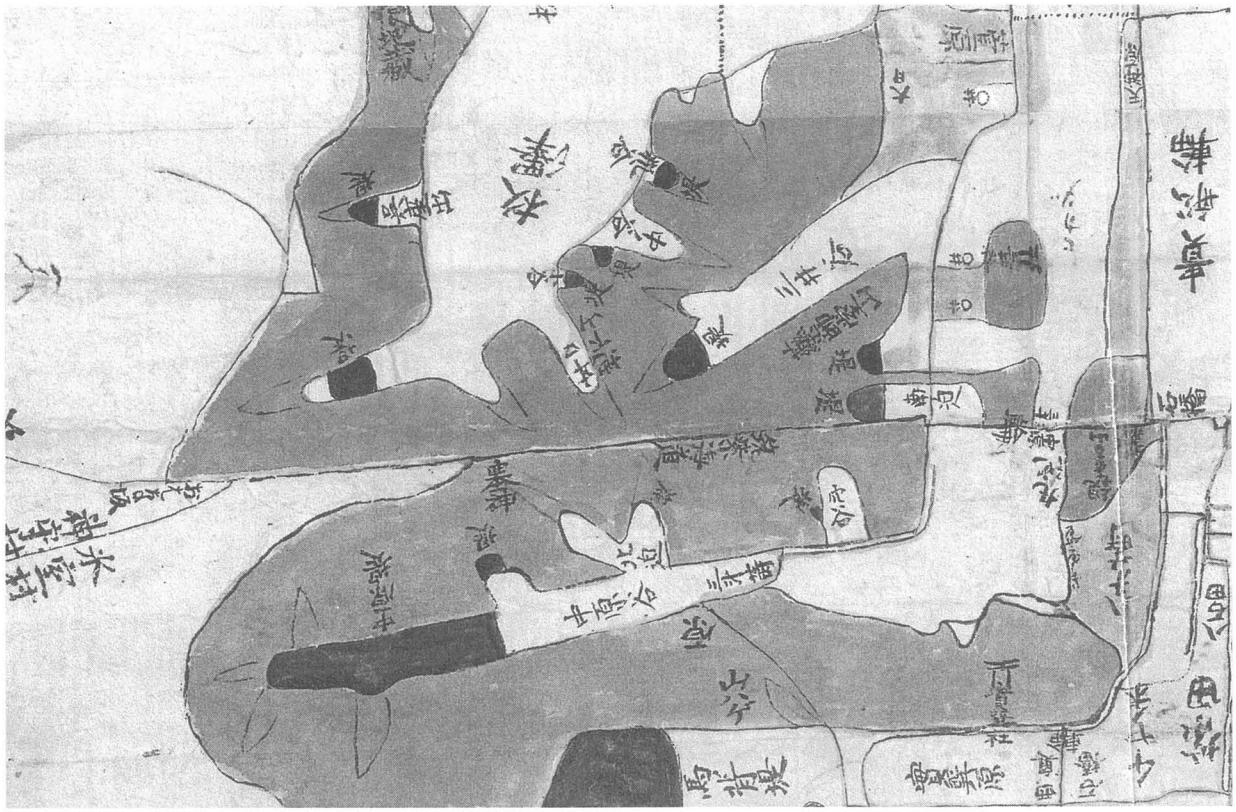
村絵図の現地比定の作業から、調査区一帯は山地として表現され「観音寺山」という地名であることを確認した。現在ではこの「観音寺山」の地名は失われているが、M点では「かんのじた」もしくは「かんのだ」と呼ばれ、丘陵の上にはかっては寺が存在していた伝承が残る。この「観音寺山」に関しては『玉昌寺記録』に、「當村石橋輪之内八斗蒔　一、観音堂　一宇、當寺抱堂敷、畑六歩　本尊観音大士、坐像作不知、堂者五尺四面東西南北皆畑、古来より観音堂と号来候」の記載内容に該当するであろう。この文書では、この観音堂山付近の畑の中に約1.5m程度の観音堂が建てられ、観音大師がまつられていたことがわかる。また絵図の「観音寺山」に記入される「地蔵」は、現在でもほぼ同じ位置に「石橋地蔵」として信仰される石仏群に比定できるであろう。

村絵図にはないが、現在調査区に隣接する小高い田地には、五輪塔が建っている。今岡利江氏によると、完存する一個体は凝灰岩製で15世紀の年代観を呈し、別個体の水輪分の石材は不明である見解を示していただいた（付篇参照）。この五輪塔は玉昌寺開基の墓石と伝えられ、同寺の過去帖には「昌子佐馬之守（左馬頭カ）　永享二年（1430）九月廿四日没」と記されている。『玉昌寺記録』には同寺開基について、「蓋シ上古者　當郡佛經山ニ有之、玉田庵と申候、當村之居民昌子と申者今之寺地寄進仕　引越致建立家名を後代ニ残さん為とて玉田庵之玉と家名之昌子とを取合せ、玉昌寺と改号申候由古老申傳候」と伝えている。この仏経山「玉田庵」が玉昌寺の前身である伝承は、江戸時代の地誌『雲陽志』にも見えている（註12)。余足になるが、同寺本尊に関して『玉昌寺文書』には「一、本尊　地蔵菩薩、坐尊長ヶ壱尺七寸作不知、但し、此地蔵菩薩、佛經山佛谷岩穴より出現し玉ふ　（中略）　大社造営ニ付、神名樋山ニ而為祈念大般若經轉讀之事、鰐渕山衆徒江蒙仰、地蔵菩薩を愛宕と号、鎮守し奉り、尊崇仕候霊佛、其後元亀元年之頃、吉川元春・小早川隆景、熊野高瀬之城を攻、霊佛霊社悉兵灰□ニ罹り、焼失仕、右之地蔵菩薩を當寺江引移、本尊ニ安置仕候由申傳候、（後略）」とある。町内の臨済宗寺院は鰐淵寺（天台宗）末寺から転宗した寺院が多いと指摘されるが（註５)、鰐淵寺との由縁を間接的に表現しているのかもしれない。

この「観音寺山」の北側に舌状に延びる丘陵地は「天神原」と呼ばれ、かっては菅原道真お手植えとされる「天神松」が植わっていた（註13)。地名「菅原」にある屋号「菅間」屋敷にも、菅原道真にまつわる別の伝承が伝わっている。

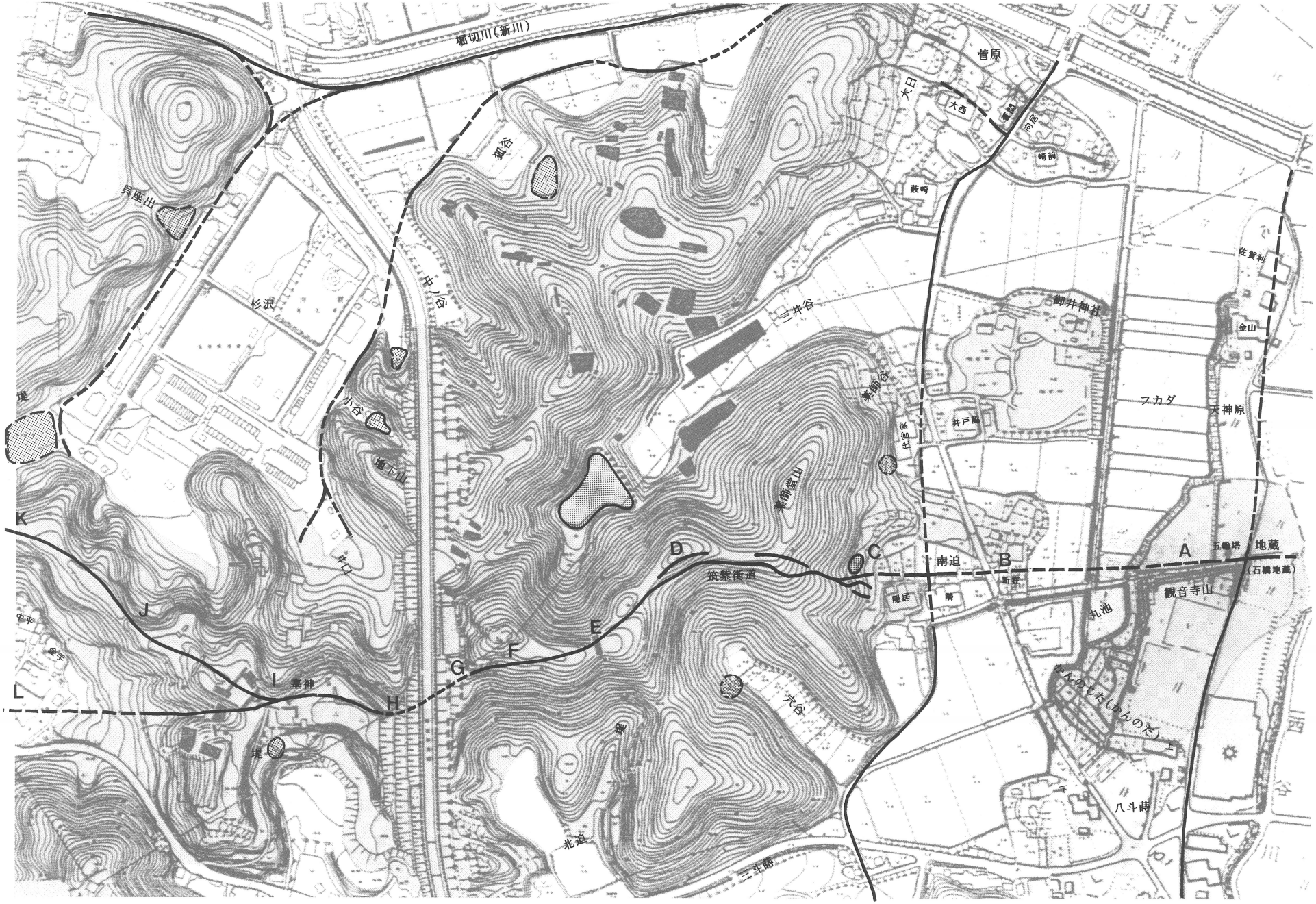
以上、当該地の景観復元を試みてみたが、中世以前の様子は史料数が少なく戦国期に「三井村」と呼ばれていたこと以外はよく分からない。また古文書に出てくる地名の中でも現在の場所が不明なものも多く、その中から「斗蒔」地名と「下」屋号について若干の推論を試みてみた。近世になると、主に村絵図によってより具体的に遺跡地周辺の様相が明らかとなる。調査区一帯は「観音堂山」と呼ばれ、小さな観音堂が建てられていた。またこの丘陵を「築紫街道」という東西道が通り抜け、小道が山裾を巡っていた様子が描かれている。この地は近在の玉昌寺と関わりが深く、開基や本尊の伝承はまだ不明な事が多

いものの、様々な断片をつなぎ合わせることによって中世期の片鱗をうかがうことができる。



第29図　「漆沼郷下直江村絵図」（原　弘氏　所蔵）

第30図　「島根県管内出雲国出雲郡」（島根県立図書館　所蔵）



第31図　「下直江村絵図」現地比定図（1：4,000）

筑紫街道について

SD02の可能性としてあげられる「筑紫街道」であるが、いかなる性格をもった道路か、よく分からないというのが実情である。地元の伝承では、上記の「天神伝説」とかね合わせて語られることが多く、文字資料としては『村絵図』に記載される「筑紫海道」の注記で確認される。文字通りに解釈すれば「筑紫（福岡）へ通じる主要道」であり、山陰道のような道とも受け取られる。近世の山陰道（石州海道）は、この調査地点よりずっと北方の直江市街地を通っているので、近世以前にさかのぼる街道遺称との想像がかきたてられる。平成12年度以来続けられた調査結果を踏まえた、推定「筑紫街道」の構造を検討してみたい。

『村絵図』には「筑紫海道（以下、筑紫街道）」は三井地塁を直進する棒道として描かれているが、現地の道遺構は屈折を重ねて尾根を縦走している。第31図には、『村絵図』に描かれる「筑紫街道」を調査結果と踏査による推定ラインとしておとしている。明治12年の「島根管内出雲国出雲郡」第30図には「向田道」という山道が記載されるが、「筑紫街道」の西側半分に該当する可能性がある。大正14年の「今市」二万五千分一地形図には、該当する道路の記載はない。

Ａ－Ｃ間（第31図）

今回の調査で検出したSD02はその構造から「筑紫街道」にともなう切通しと考えるのであるが、現在の町道の方向軸（Ｎ－53°－Ｅ）との間に若干の違いが生じている。『村絵図』には「観音堂山」を越えた「筑紫街道」は、「南迫」の窪みをかすめて溜池の脇から三井地塁を昇るように描かれている、これはＣ点の溜池に該当するであろう。SD02の方向軸（Ｎ－60°－Ｅ）を延長するとC点は直線で結ばれ、「南迫」では屋敷地と畑地の地境である土手上を通ることになる。SD02の底部には側溝らしき小溝が２本確認されたが、うち一本の方向軸はＮ－55°－Ｅで現在の町道とほぼ同一軸となる。時期差によって方向軸が変更されていることも考えられる。C点付近には地蔵堂がまつられているが、かってはこの脇を「筑紫街道」が通っていた伝承が伝わっている。

Ｃ－Ｄ間

Ｃ地点から三井地塁の勾配を上ることになるが、入り口と山腹には複数の切通し状の溝渠址が確認できる。数度にわたりルート変更が行われたのではなかろうか。地蔵堂の裏手からのルートは、つづら折りに斜面を上りやがて大規模な切り通しの底を歩く。溜池脇のルートは比較的、曲がりの少ないコースをとる。より山頂側にも一本の切通し址が断続的に並走する。

Ｄ－Ｅ間

山頂をやや下った南側山腹に、切り通し址が縦走する景観が現出する。尾根上ではなく山腹が選地された理由として、路面としての起伏を軽減する目的が考えられる。Ｄ点付近にも複数の切り通し址が認められる。

Ｆ－Ｈ間

平成12年度に調査されたＦ地点（00－３区）では、互層構造をもつ硬化層（以下、版

築状）が確認された。H付近では、南側山腹に加工段らしき平坦地が尾根沿いに西走するが、町道杉沢線が横断する。

H－I間

この付近は昭和30年代の三井開拓によって大きく削平され、調査以前は茶畑となっていた。H点付近では、平成14年度の調査で溝跡が検出され、遺構内から土師質土器皿が出土している。I点の東側00－4区6・8トレンチからは版築状の硬化層が確認された。この硬化層から須恵器の砕片が出土している。南側の山腹には横口式炭焼窯が築かれている。

I地点

現在、「賽ノ神」が鎮座している。本来の位置は東側にあったが、三井開拓の開墾によって現在地に移されている。平成14年度の調査では、東側一帯から寛永通宝や土人形などが出土している。この地域では「どっちつかずの賽ノ神」といわれ、賽ノ神は村境や道の分岐点に祀られることが多いといわれている。この賽ノ神も「氷室村」と「下直江村」との村境付近に立地し、ここを基点としてK点に向かう道（筑紫街道）とL点に向かう分岐道にわかれる。

I地点（00－4区7トレンチ）では、谷地形を埋め立てた上に版築状の硬化層が2時期にわたって築かれていた。この硬化層からも須恵器の砕片が出土している。規模からみて大掛かりな造作であり、版築構造もしっかりしたものである。

I－J間

00－4区1、2、3トレンチでは大規模な切通しと大型溝渠（SD01）が確認された。I地点西側の3トレンチから2時期に分かれる版築が確認された。付近からは北側斜面に開口していた横口式炭焼窯1号窯と2号窯が検出され、2号窯は切り通しによって窯体の上部が削平されている。2号窯は出土遺物から8世紀前半代が想定されるので、切り通しはそれ以降に削平されている。平成12年度の調査ではSD01の年代は分からなかったが、平成14年度の調査で若干の遺物の出土をみているので今後の検討で明らかになるであろう。平成14・15年度の調査では、この尾根の北側斜面一帯から、弥生住居址群と弥生から古墳時代にかけての加工段群が確認されている(杉沢I遺跡)。平成14年度の調査では、切通しないし溝状遺構が複数尾根を縦走する様子が確認された。

J－K間

中央工業団地造成予定地から外れるので未調査域である。道址らしき平坦地が尾根上を縦走し、谷地形を埋め立てたとおもわれる土橋状の個所もある。

I－L間

「筑紫街道」（A－K間)から分岐する道である。00－4区9トレンチからは、7～8本の大小様々な溝状遺構が検出された。この中から、上幅50cm前後、深さ30cm程度の小溝(SD02、03、04、05、06、07)に注目する。とくにSD05は溝というより、不定形な掘り込み群が不連続して続く様子であった。埋土は何れも硬化粘土層であり、覆土中より古代瓦砕片が僅かであるが出土している。こうした構造は、松江市の渋ケ谷遺跡の様相に類似しており、道状遺構の下部構造である可能性が指摘されるので再検討が必要である。谷底地形であるのにかかわらず堆積土が薄く底面が平滑であること、底部直上から古代瓦が出土す

る状況、00－４区１トレンチで検出されたSB01が南側半分を失っている状況から、この９トレンチの谷地形自体が、人工的に加工された可能性も考えられる。

この近傍から８世紀中頃の古代瓦窯が１基検出されているが、平成14年度の調査では、この谷裾の調査区より複数の溝と、瓦が敷き詰められた土橋状の地塁が検出されている。この調査では、ここで生産された軒先瓦と三井神社福井で採取された軒先瓦とが同笵瓦であることが判明した。瓦の破片もこのＩ－Ｌ間沿いを中心に分布しているので、このルートを経て東側に供給されている可能性が考えられる。このＩ－Ｌ線を西側に延長すると、出雲郡衙関連遺跡に比定される後谷遺跡付近に出ることができる。

以上、今までの筑紫街道に関連する遺構の調査概要と踏査をまじえた見解の中間報告を行った。「筑紫街道」の成立時期について、Ｉ－Ｊ間の切通しは８世紀中頃より後の成立が確認され、溝遺構の一部はその出土遺物から中世期には成立していたと推定される。ただし、Ｉ－Ｌ間に関しては８世紀中頃まで遡る可能性がある。賽ノ神付近の出土遺物や村絵図の記載からみると、幕末頃は使われていたようである。枝分かれして「薬師堂山」へ抜ける山道には石灯篭（嘉永４（1851）年銘）が建っている。下限として、八斗蒔Ｉ遺跡SD02では近代頃の廃絶が想定される。大正４年の地形図には筑紫街道に相当する道の記載はないが、この頃には使われなくなったものか、よほどに利用頻度が落ちていたものと考える。現在では中原谷越えのルートが、結―氷室間を結ぶ道として機能している。

切通しは複数平走する様子が確認され、八斗蒔Ｉ遺跡SD02（註16）や三井Ⅱ遺跡00－４区１トレンチSD01など大規模なものもある。三井Ⅱ00－４区でみられた谷間を埋める造成土量も大きく、版築状硬化層は本格的な造作である。大掛かりな動員をもって道を敷設し、度重なる補修を伴って維持されていた様子がうかがえる。

幅広規格で直線プランを有する古代官道に関する研究は、長年にわたって盛んに行われている。この筑紫街道が古代官道（『出雲国風土記』真西道など）に該当するかの検討は、広域にわたる視点が必要とされるのでこの報文の意図するところではないが、街道を称するに遜色ない構造を有しているといえるかもしれない。

面白いことに『村絵図』が描かれた時代の主要街道である「石州街道」は道が描かれるものの街道名の注記はない。「筑紫海道」の注記は文政６年当時の街道状況には即しておらず、さらに直線道表現はあきらかにデフォルメされている。これらは現代の基準からみれば歪みといえなくもない。しかし、この「筑紫」を冠した道路には、御井（三井）神社にまつわる木俣神話（『古事記』註17）、先に述べた九州へ下向する天神（菅原道真）伝説、尼子と毛利が争った高瀬城攻防など、郷土の歴史を彩った祖先たちの彷徨の足跡を示しているのかもしれない。

今回の調査をふくめた周辺の発掘調査によって、この地域変遷の一端が明らかになりつつある。今後の精力的な調査と研究によって、新たな歴史像が提示されることに期待したい。

註１　『斐川町文化財報告第24集　平成11・12年度斐川中央工業団地造成に伴う　杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡発掘調査報告書』斐川町教育委員会　2001年

註２　池橋達雄「「筑紫街道」についての一考察－「出雲国風土記」駅路記事および地籍図遺称地名との関連から－」

木本雅康「出雲国宍道・狭結両駅間の古代駅路」

池田敏雄「古道と新道」

註３　『風土記』日本古典文学大系２　岩波書店　1958年

註４　『新修島根県史　史料編１古代・中世』島根県　1966年

註５　『斐川町史』斐川町史編纂委員会　1972年

註６　『出雲尼子史料集　上巻』広瀬町教育委員会　2003年

註７　『鰐淵寺文書の研究』鰐淵寺文書刊行会　1963年

註８　『新特産シリーズ　ソバ　－条件に合わせたつくり方と加工・利用－』本田裕　農文協　2000年

仮に「八斗蒔」に当てはめて換算すると、８斗は２俵（約144ℓ）であるから、おおよそ２反（約2,000㎡）前後の面積に想定される。穀類として蕎麦の播種を想定した場合は、現代農法では８斗（２俵）あれば約20反の作付けが可能となるが、当然、これらの数字は相当に割り引いて考えなければならない。

註９　木村茂光「大開墾の時代と畠作」『ハタケと日本人』　中公新書　1996年

註10　聞き取り調査は、発掘調査に従事していただいた、地元の作業員の方々から伺うことができた。また、本報文作成にあたり、伊藤義朗・千代美御夫妻、頃常久夫氏、梶谷亮氏、内田栄氏に確認させて頂いている。また、玉昌寺の玉田宗達氏から『玉昌寺文書』をご提示して頂いた。

註11　玉昌寺　玉田宗達氏蔵

註12　『雲陽誌』歴史図書社　1976年

註13　池田敏雄「土師原が天神原に」『出雲の原郷　斐川の地名散歩』報光社　1986年

註14　『千駄ヶ谷五丁目遺跡の諸問題』千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会　1998年

註15　峰岸純夫「女堀の謎を解く」『よみがえる中世５　浅間火山灰と中世の東国』　平凡社　1989年

註16　足利健亮「溜池分布の謎を解く」『景観から歴史を読む－地図を解くたのしみ－』　ＮＨＫ出版社　1998年

SD02が溜池である可能性について検討を行った結果、堤の位置が想定できないこと、水成堆積を示さない堆積状況、自然地形を利用した周辺溜池との構造的な相違、低湿地を前面にした溜池の必要性の有無、出土遺物から近代廃絶を想定できるが聞き取りや史料からの裏付けがない、などと溜池目的の開削にもやはり疑問点が多い。

註17　『古事記』岩波文庫　1963年

参考文献

『新訂　社会地理学の基本問題　－地域科学への試論－』〈増補版〉水津一郎　1988年　大明堂

「中世絵図読解の視覚」『絵図にみる荘園の世界』吉田敏弘　1987年　東京大学出版会

附　　編

1　八斗蒔Ⅰ遺跡　昭和62年の調査

宍道　年弘（斐川町教育委員会）

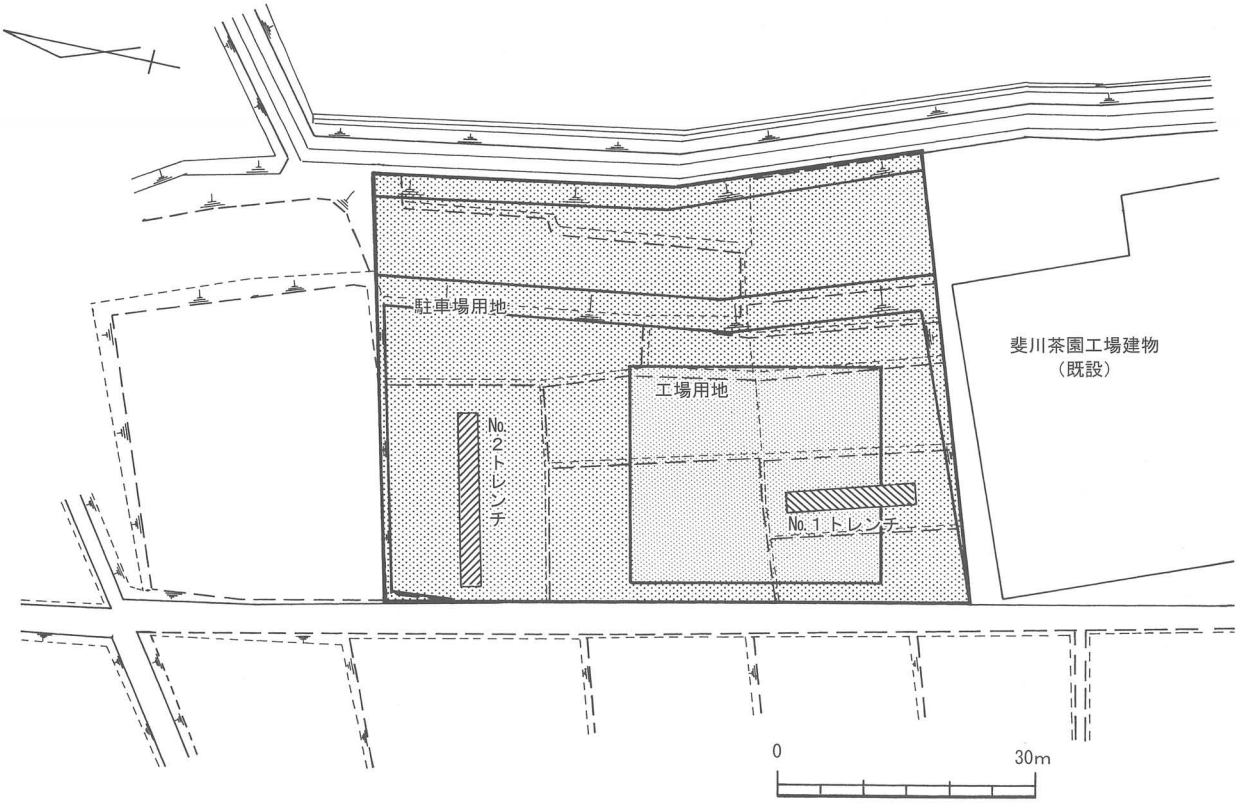
1．調査に至る経緯

昭和62年２月３日、有限会社斐川茶園（代表取締役　加藤和正）より製茶工場の工場増築及び駐車場用地造成工事地内（開発面積3,327㎡）における埋蔵文化財の分布調査依頼を受けた斐川町教育委員会は直ちに踏査を行った結果、造成予定地内において表面上では遺構等を確認することができなかったが、隣接する同じ地形では土器が散布しているため遺跡確認のための試掘が必要である旨を同年２月６日付けで回答した。

試掘調査は工場用地と駐車場用地に２ヶ所のトレンチを設け、昭和62年２月17日に着手し、同年２月28日に終了した。

2．調査の概要

造成予定地の南寄りに設定した№.１トレンチは標高11.20mの田地に位置し、南北15m、東西2.5mで面積37.5㎡、また北寄りに設定した№.２トレンチは標高11.14mの田地に位置し、南北2.5m、東西20mで面積50㎡を測る。それぞれ手掘りで調査を進めたが、本調査は後に委ねることになり遺構の掘削は行っていない。なお、№.１トレンチは遺構の広がりを探すため、一部トレンチを拡張した。



第１図　トレンチ配置図（網かけ部分は造成予定地）

No.１トレンチの遺構と遺物

SB01

トレンチの東南側で検出された総柱の南北棟掘立柱建物跡で、南北３間（3.6m）×東西３間（３m）、床面積10.8㎡を測る。柱間寸法は桁行1.8m等間、梁行1.5m等間で、主軸方向は、N―11°―Wである。

Ｐ１～Ｐ９のピットは、いずれもほぼ円形で径30～60cmを測る。Ｐ２・Ｐ４・Ｐ８のピットではピット検出面において径15～25cmの柱痕跡を確認している。また、Ｐ４とＰ７から須恵器の甕片が発見されている。

SD01

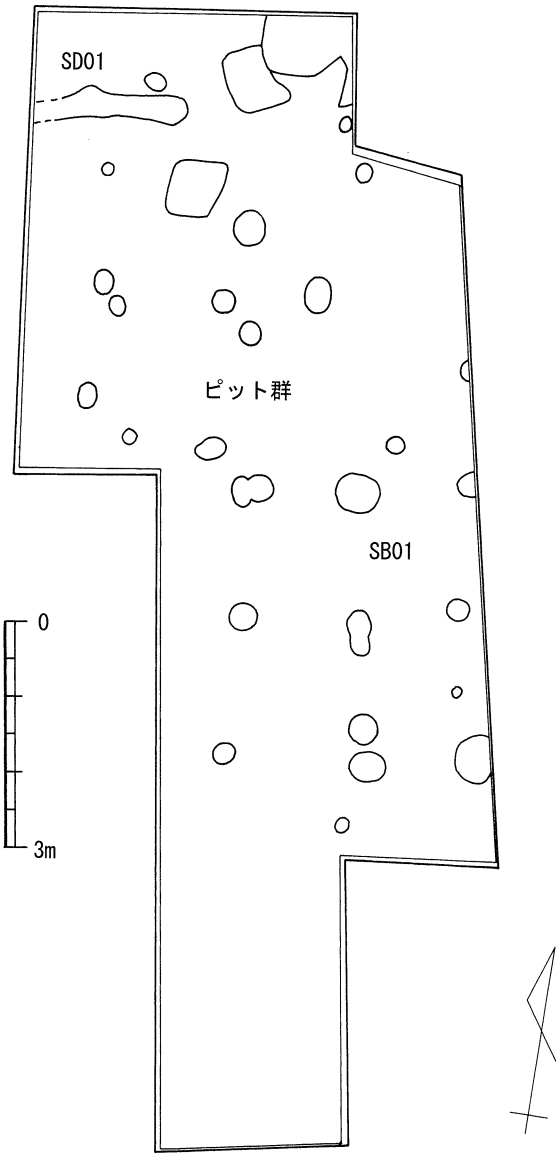
幅約0.3m、長さ2m以上を測る溝状の遺構である。ほぼ東西方向に伸びていて西方向はトレンチ外にも続いていると思われる。

ピット群

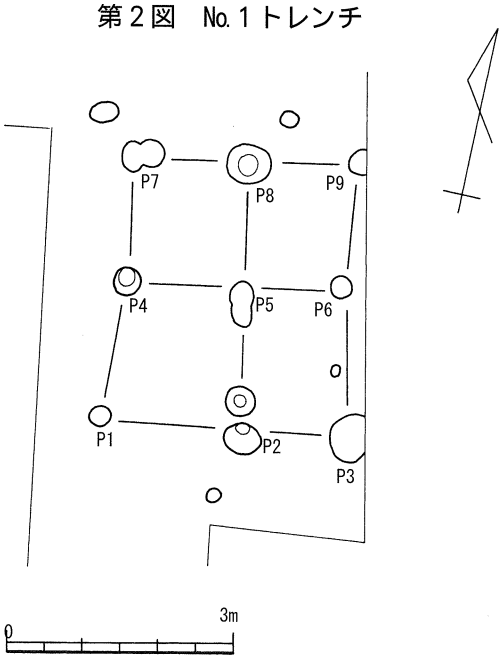
SB01以外で検出されたピットは21穴となる。ピットの規模、形状で３タイプに分類される。直径20cm以下で円形を呈するもの９穴（Ａタイプ）、直径30cm程度で円形を呈するもの９穴（Ｂタイプ）、一辺80cm前後で隅丸方形を呈するもの３穴（Ｃタイプ）である。遺構検出面が現田地から浅いことからＡタイプのピットは新しい時期の杭跡などが考えられる。Ｂタイプは柱痕跡が確認できるものがあり、SB01と同規模であることから小規模な建物か柵列などがあった可能性がある。Ｃタイプは規模が大きく、平面形が隅丸方形であることから大型の建物が建っていた可能性が考えられる。

包含層遺物

包含層から出土した遺物は須恵器、陶磁器、黒曜石である。いずれも小片のため実測不可能である。須恵器は古墳時代後期以降のもので、大半は甕類で、坏類は２、３点みられるのみである。陶磁器は中世以前のものはなく、近辺の窯で焼いたものであ



第２図　No.１トレンチ



第３図　No.１トレンチSB01平面図

る。黒曜石は黒光りするガラス状の石材で製品になるものはない。

No.２トレンチの遺構と遺物

ピット列

東西に長いトレンチのほぼ中央で東西方向に８穴のピットが検出された。東側４穴と西側４穴に分かれ、西側のピットは３間（3.8m）で、柱間寸法は心々を測ると1.3・1.1・1.4mとなり、直径は35cm前後で円形を呈する。東側のピットも３間（4.3m）で、柱間寸法は1.4m・1.4m・1.5mとなる。直径は35～40cmで円形を呈する。

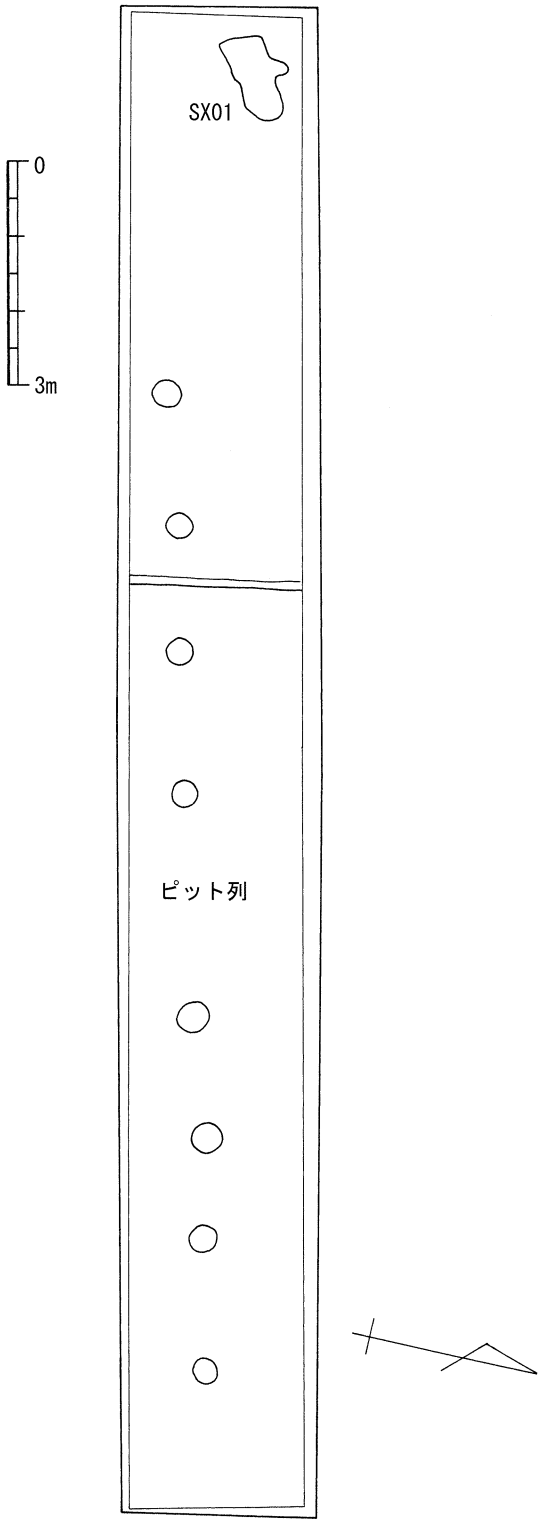
主軸方向はN－85°—Wを測る。柵列か塀、あるいは対応するピットが南側に存在し、建物跡になる可能性もある。

SX01

トレンチの西端で検出された長辺95cm、短辺40cmの土坑状遺構で、いびつな長方形状を呈している。

包含層遺物

包含層から出土した遺物の大半は須恵器と陶磁器である。須恵器は古墳時代以降の甕類で、若干坏類がみられる。陶磁器は近世以降の地元産のものである。



第４図　No.２トレンチ

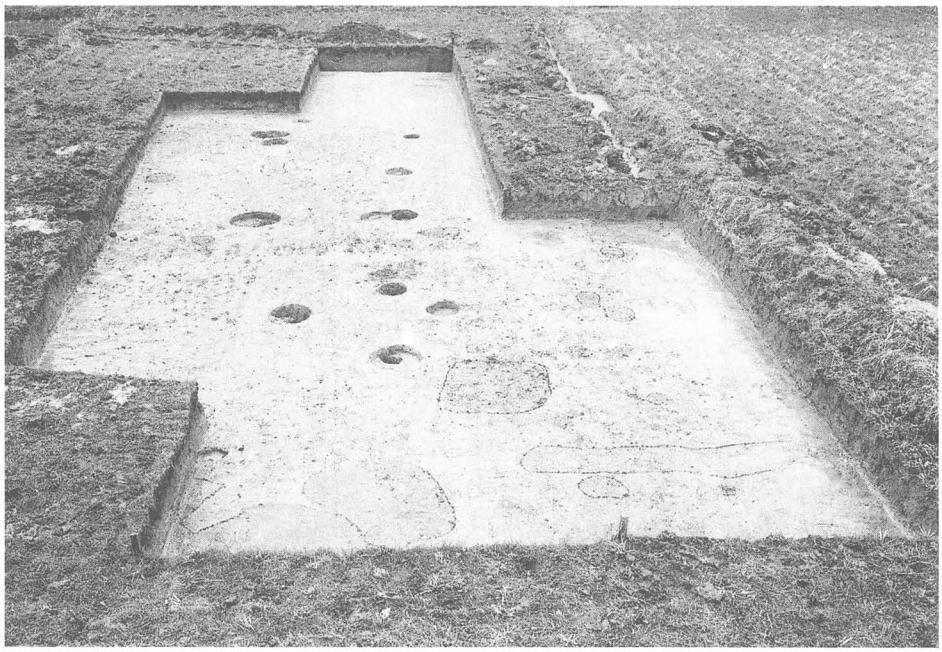
３．まとめ

今回の調査はトレンチによる調査で遺跡全体のごく一部を調査したにすぎないが、建物遺構などが確認されたことは大きな成果であった。

出土した遺物からみると、須恵器が大半で多くは細片であるが、ほぼ古墳時代後期～奈良時代までの時期におさまるものと考えられる。検出された総柱の掘立柱建物は遺物等からは性格をつかむことは難しく、高床倉庫を有する古墳時代集落の存在を記すにとどめておきたい。

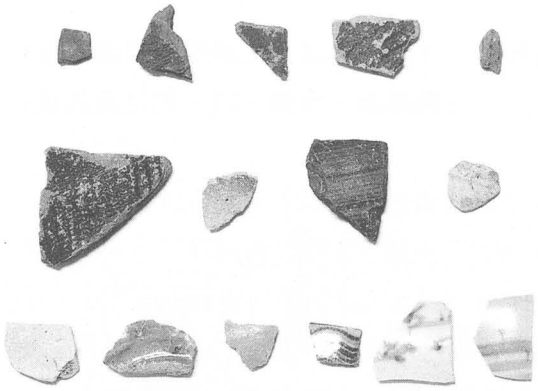
遺跡は東側田面との比高差が約５ｍあ

り、周辺がよく見渡せる高台に立地している。今後、周辺を調査することにより遺跡の性格、広がり等を把握することができよう。

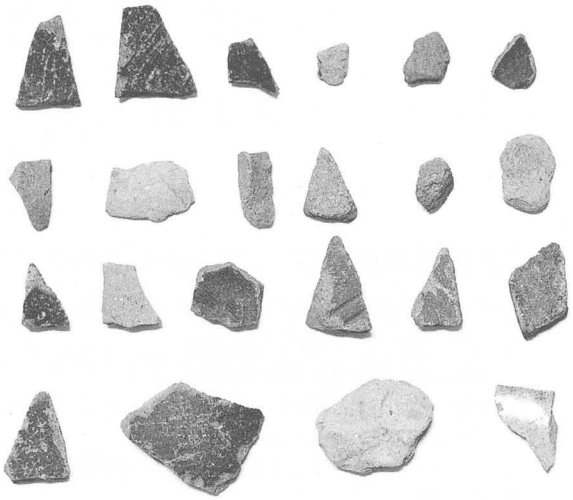


No.1トレンチ遺構検出状況（北より）

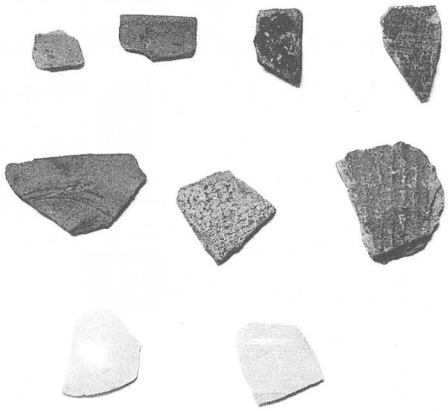
No.2トレンチ遺構検出状況（西より）



No. 1 トレンチ出土遺物 (1)

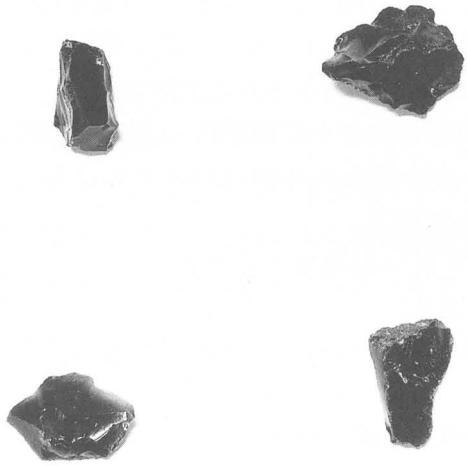


N0. 2 トレンチ出土遺物 (1)

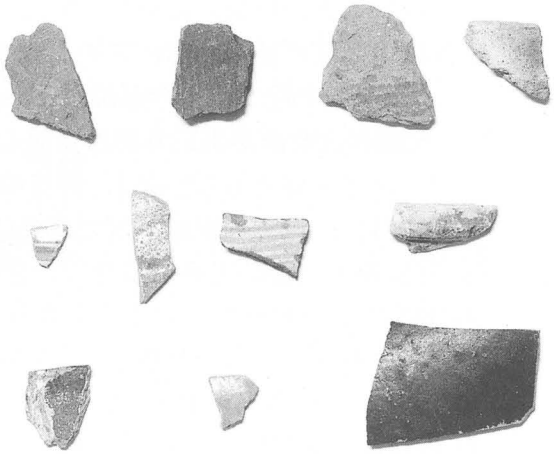


No. 1 トレンチ出土遺物 (2)

No. 2 トレンチ出土遺物 (2)



No. 1 トレンチ出土遺物 (3)



No. 2 トレンチ出土遺物 (3)

2　八斗蒔の五輪塔について

五輪塔報文　今岡　利江（広瀬町教育委員会）
（実測図　今岡　稔・利江氏提供）

〈各部計測値〉

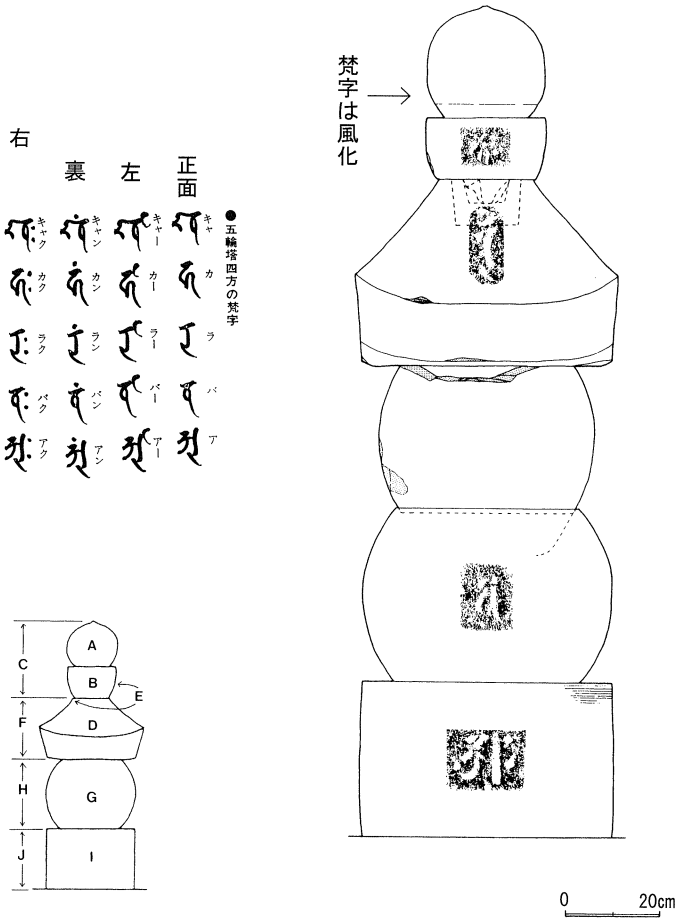
○空風輪
（空　輪）最大径(A)－22.4cm
（風　輪）最大径(B)－24.8cm
（空　輪）最大径(C)－36.0cm
（ホゾ部）最大径－10.0cm
長　さ－4.8cm：丸形（円筒形）

○火　輪
（ホゾ穴部）最大径－10.0cm
深さ4.7cm：隅丸方形
（火　輪）のきはば軒幅(D)－56.0cm
笠上幅(E)－20.0cm
笠高さ(F)－39.0cm

○水　輪
（水　輪）最大径(G)－53.0cm
高　さ(H)－36.0cm

○地　輪
（地　輪）最大幅(I)－53.0cm
高　さ(J)－32.5cm

○別個体水輪
（水　輪）最大径－46.0cm
高　さ－30.0cm



八斗蒔　五輪塔実測図（1：16）

〈石材〉

横筋状の節理が走ることが特徴としてあげられ、凝灰岩だと思われる。水輪の一つ(上)は、別石材と思われるが石材は不明。

〈年代的特徴〉

五輪塔の編年は、宝篋印塔と比べて形態上の特徴に乏しく、さらに紀年銘を持つ個体が少ないことからまだ確立していない。その為、詳しい年代観を提示することは出来ないが、以下に記す特徴から、この五輪塔は15世紀代と考えられる。

① 地輪部の中程で、やや胴が張る。

② 火輪部は断面が正三角形状を呈し（新しい年代のもののように扁平につぶれてはおらず、高さが保たれている）、軒反(のきぞり)の造りも丁寧で、中心部から外側にかけてのはねあがり（特に、四隅の面取り状の部分に顕著）が造られている。

③ 空風輪も比較的丁寧な造りで、空輪部が宝珠状のきれいな球形を呈する。

④ 梵字が、比較的しっかりとしたやげん薬研彫りである。

上記にあげた４つの特徴から、やや古い形式（14世紀代）のものと判断できるが、

⑤ 地輪の上面が平らで水輪に向けてのふくらみが無い。

⑥ 空風輪の境部のつくりがやや粗い（風輪の上面が平で、空輪にかけてのふくらみが無い）。

これら２つの特徴は比較的新しい(16世紀代)石塔にみられる特徴であるので、14世紀代まで遡ることはできないと判断する。

3　八斗蒔Ⅰ遺跡発掘調査に係る花粉分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント㈱）

1　はじめに

本報告では、遺跡近辺の植生復元および、切り割り状遺溝の用途推定の一助とすることを目的として、発掘調査に伴って露出した各地点より採取した試料を対象として花粉分析、プラント・オパール分析を行った。また本報告は、斐川町教育委員会が文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した委託業務報告書を簡略化したものである。

八斗蒔遺跡は島根県東部、簸川郡斐川町地内に立地する遺跡である。

2　分析試料について

各分析試料は斐川町教育委員会と協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。図１に試料採取地点を示す。また、調査地点の模式柱状図および試料採取層準を、図２、３のダイアグラム左端に示す。

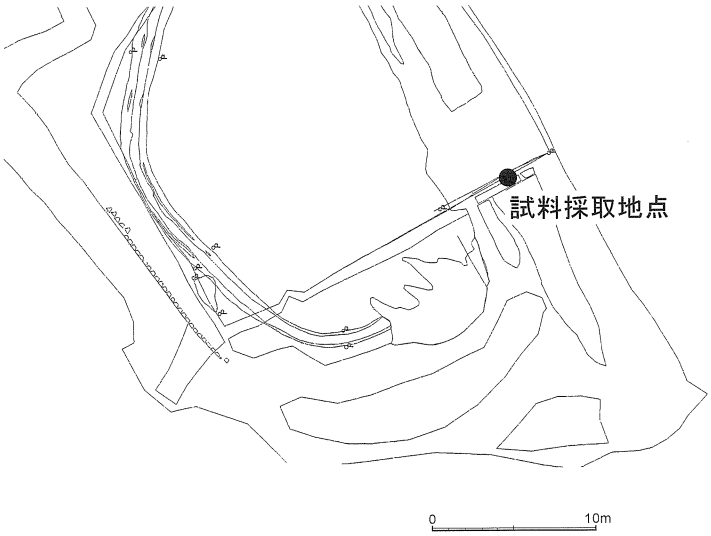


図１　試料採取地点

3　分析方法

花粉分析処理は渡辺（1995）に従い、植物珪酸帯分析処理は藤原（1976）のグラスビーズ法に従い実施している。全ての分析の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1,000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また、中村（1974）にしたがい、イネ科花粉をイネを含む可能性の高いイネ科（40ミクロン以上）とイネを含む可能性の低いイネ科（40ミクロン未満）に細分した。プラント・オパール分析ではグラスビーズが400個体以上になるまで検鏡を行い、同時に検出されるイネ科の数種類について同定を行っている。

4　分析結果

花粉分析結果を図２の花粉ダイアグラム、図３のプラント・オパールダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として各分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示している。

プラント・オパールダイアグラムでは、各分類群毎に検出数を１ｇあたりの含有数に換算し、スペクトルで示している。

また、花粉分析処理の際の残渣を概観した結果を表１に示す。

5　花粉分帯

花粉分析の結果を基に局地花粉帯として１帯２亜帯を設定した。以下に各花粉帯の特徴を示

す。また、本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料№も下位から上位に向かって記した。

Ⅰ帯（分析№１地点試料№３～１）

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、スギ属、コナラ亜属を伴う。イネ科（40ミクロン以上）の出現率から、さほど高率にならないｂ亜帯（試料№３、２）と、特に高率を示すａ亜帯（試料№１）に細分した。

６ 「道」の可能性について

古絵図には、調査地点を横切る「道」が描かれている。今回の凹地は、まさに描かれた「道」の上に位置する切り割り状遺溝である。それでは、凹地埋土に認められるどの「面」が「道」の遺溝面であったのであろうか。以下で下位の層準から検討を加えていく。

⑴ 地山上面

地山上面は中粒砂層上面、あるいは中粒砂層を削り込む試料№６を採取した有機物に富むシルト質細粒砂層上面である。これらの面は、「道」とするにはあまりにも脆いと考えられる。

⑵ 有機質粘土層上面

有機質粘土層は上面がほぼ水平で、凹地全面に分布していた。この層の下部で試料№５を、上部で試料№４を採取し、花粉分析、プラント・オパール分析および微化石概査を行っている。

概査結果で示したように、プラント・オパールの含有量は多かったものの、花粉の含有量は少なく、珪藻は含まれるものの破片が多い。さらに植物片も少なく、微粒炭が多く含まれてる。また、イネのプラント・オパールは全く検出できなかった。イネ科（40ミクロン以上）花粉は検出されるものの、イネ科（40ミクロン未満）花粉やその他の草本花粉もイネ科（40ミクロン以上）花粉を上回る出現率を示した。以上の含有微化石の特徴は、いわゆる「古土壌」で認められることが多い。現場で可能性が指摘された「水田堆積物」の特徴とは、大きく異なる。以上のことから、この層上面が多少の浸食（あるいは削平）を受けているにせよ、旧土壌面であることは確かであり、「草地」の可能性がある。ただし、栽培種であるソバの花粉が検出されるなど、「畑」の遺構面であった可能性もある。また、あえて考えるなら「道」の遺構面であった可能性も否定は出来ない。

「道」の可能性を論じるためには、遺溝面が削平を受けすでに失われている可能性もあるが、「道」として機能できるか否かを調べるために、密度試験などを行う必要もあろう。

⑶ 粘土層上面

下部の細砂で試料№３を、上部の乱れた粘土層で試料№２を採取し、各種分析を実施している。

試料№２、３には豊富な量の花粉化石が含有され、植物片も多くなる反面、微粒炭は減る。しかし、珪藻化石は下位の試料№４～６と同傾向で破片が目立つ。イネのプラント・オパールは僅かに検出されるが、イネ科（40ミクロン以上）花粉はさほど高率にならない。

花粉化石の保存状況や植物片が含まれる様子から、この層が沼沢湿地で堆積した可能性が指摘できる。一方で、イネのプラント・オパールや、イネ科（40ミクロン以上）花粉の検出量が少ないことから、「水田耕土」であった可能性は低い。むしろ「溜め池」の様な状況が連想される。また、珪藻化石の保存状況が悪いことから、沼沢湿地の土砂による埋め土である可能性

も残る。

いずれにしろ、この層状面が「道」の遺溝面であった可能性は、極めて低い。

⑷　埋土

粘土ブロックを多量に含む粘土層である。上位の中粒砂混粘土との境界は漸移的であり、この層上面が「道」であったとは考えにくい。

⑸　有機質に富む中粒砂混粘土

ほぼ水平に堆積し、下位の埋土から漸移的に変化する。この層で試料№1を採取し、花粉分析、プラント・オパール分析および微化石概査を行っている。

概査結果で示したように、プラント・オパール、花粉、珪藻ともに多量に含まれ、植物片、微粒炭も少なからず含まれていた。また、イネ科（40ミクロン以上）花粉が高率で出現するほか、ソバ属やワタ属の花粉も検出される。さらに、イネのプラント・オパールもわずかであるが検出される。　以上の含有微化石の特徴は「水田堆積物」の特徴と一致する。

したがってこの層上面は、「道」ではなく「水田」であった可能性が高い。

⑹　まとめ

以上のように、各層あるいは各層上面の状況を検討すると、最も「道」の遺構面である可能性が高いのは「有機質粘土層」上面ということになる。ただし、「道」の遺溝面であったと断定するには、不十分である。また、「道」の遺構面が浸食、あるいは掘削され、残存していない可能性もある。

7　古環境変遷

ここでは、諸分析結果より推定できる古環境について、堆積過程に従い述べる。

⑴　有機質粘土層堆積時

微化石がほとんど検出できなかったことから、堆積過程についての判断はできない。

前述のように「土壌化作用」を受けた「古土壌」であると推定されることから、一定期間「畑」、「草地」、「道」であった可能性が指摘できる。ただし、いずれも判断材料に乏しく断定は出来ない。

⑵　粘土層

①堆積状況

花粉、炭、植物片の含有状況から、沼沢湿地での堆積が推定される。イネ科（40ミクロン以上）花粉や、イネのプラント・オパールの検出傾向から、「水田」の可能性は否定は出来ないものの低いと考えられる。「溜め池」あるいは沼沢湿地起源の土砂を用いた埋め土である可能性が指摘できる。

②花粉帯の対比（堆積時の時代観）

花粉組成でマツ属（複維管束亜属）が卓越し、中海・宍道湖地域での地域花粉帯（大西、1993）のイネ科花粉帯マツ属亜帯に対比可能である。この花粉帯の示す時期は、およそ近世～近代にかけてである。

③周辺地域の古植生

マツ属（複維管束亜属）花粉が卓越することから、遺跡背後の中国山地縁辺部にはアカマツ林が広がっていたと考えられる。また、随伴されるコナラ亜属は、アカマツ林内に混

淆していたと考えられるほか、スギは林内の谷斜面に分布していたと考えられる。

遺跡近辺には、田畑が広がり、畑ではソバも栽培されていたと考えられる。また、調査地はおそらく「溜め池」で岸辺にはカヤツリグサ科、イネ科などの草本が生育し、土手などの乾燥地にはキク科などの草本が生育していたと考えられる。

⑶　埋土

現場での観察から、埋土と判定した。おそらく、水田造成のために「溜め池」あるいは「沼沢湿地」を埋めたものと考えられる。

⑷　有機質に富む中粒砂混粘土

①堆積状況

微化石の検出状況から、前述のとおり「水田」の可能性が高い。

②花粉帯の対比（堆積時の時代観）

試料№.３、２層準同様に、花粉組成ではマツ属（複維管束亜属）が卓越し、中海・宍道湖地域での地域花粉帯（大西、1993）のイネ科花粉帯マツ属亜帯に対比可能である。この花粉帯の示す時期は、およそ近世～近代にかけてである。

③周辺地域の古植生

試料№.３、２層準と同様に花粉組成で、マツ属（複維管束亜属）花粉が卓越し、スギ属、コナラ亜属を伴うことから、遺跡背後の中国山地縁辺部の植生に変化は認められない。

調査地および遺跡近辺には田畑が広がり、畑ではソバやワタが栽培されていたと考えられる。

８　まとめ

切り割り状遺構の用途推定の一助として、花粉分析およびプラント・オパール分析を実施した。用途として推定されていた「道」については、その存在を明らかにすることは出来なかった。「道」として推定可能な層準は、地山となる砂層上位で比較的水平に連続的に分布する「有機質粘土層」上面であるが、断定には至っていない。

その他、「有機質粘土層」上位の「粘土層」は、「溜め池」あるいは「沼沢湿地」での堆積物であると考えられる。さらに上位の「粘土層」は、「水田耕作土」であったと考えられる。

得られた花粉組成と大西（1993）の花粉帯の対比から、「粘土層」より上位の堆積物、埋め土は近世以降のものと考えられ、この時期には畑作物としてワタ、ソバが栽培されていたことが判る。

引用文献

大西郁夫（1993）中海・宍道湖周辺地域における過去2,000年間の花粉分帯と植生変化．地質学論集，39，33-39.

中村純（1974）イネ科花粉について，とくにイネを中心として．第四紀研究，13，p.187-197.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究⑴－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，９，p.15-29.

渡辺正巳（1995）花粉分析法．考古資料分析法，84，85．ニュー・サイエンス社

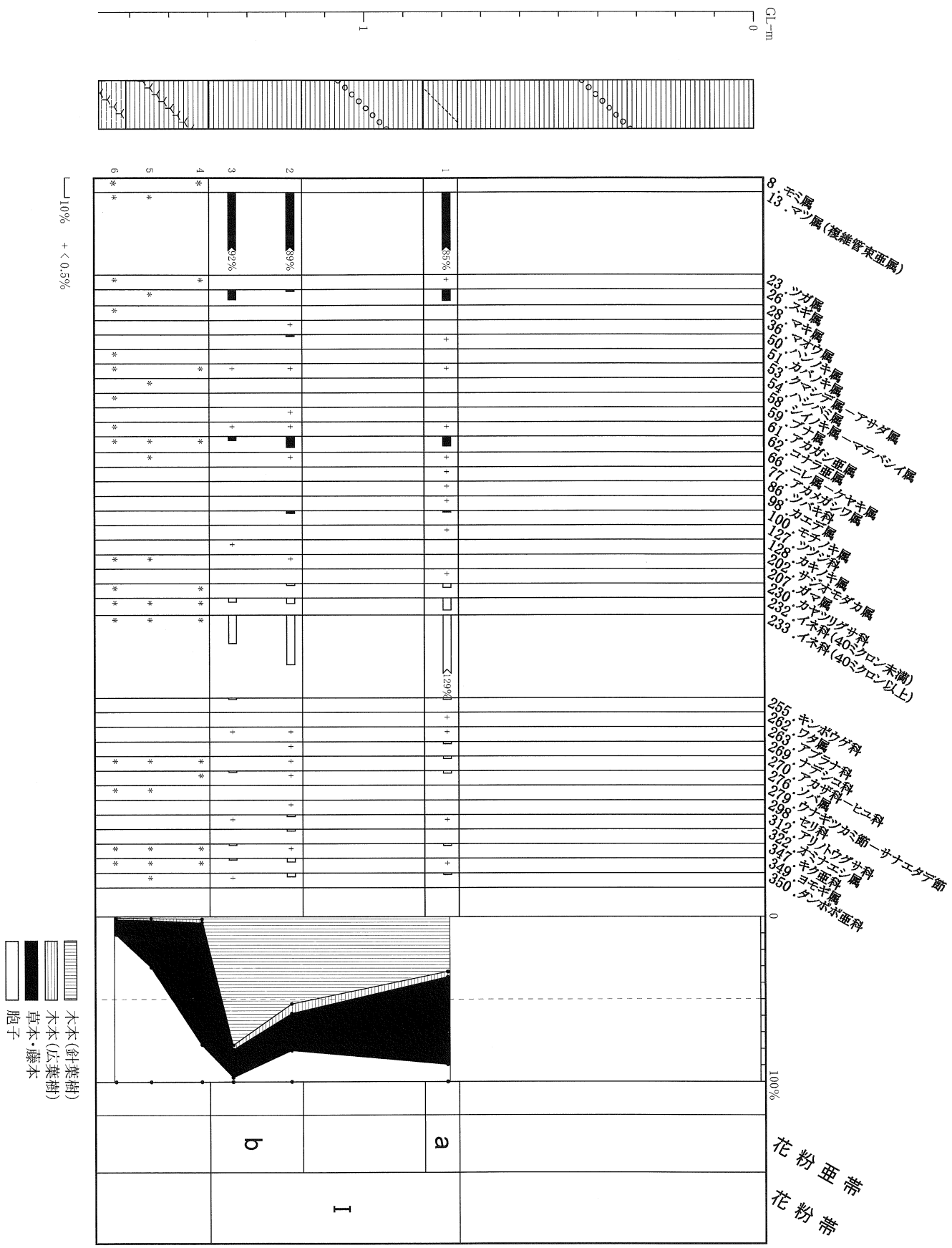

GL−m
0
1
8・モミ属
13・マツ属（複維管束亜属）
23・ツガ属
26・スギ属
28・マキ属
36・マオウ属
50・ハンノキ属
51・カバノキ属
53・クマシデ属−アサダ属
54・ハシバミ属
58・シイノキ属
59・ブナ属−マテバシイ属
61・アカガシ亜属
62・コナラ亜属
66・ニレ属−ケヤキ属
77・アカメガシワ属
86・ツバキ科
98・カエデ属
100・モチノキ属
127・ツツジ科
128・カキノキ属
202・サンショモダカ属
207・ガマ属
230・カヤツリグサ科
232・イネ科（40ミクロン未満）
233・イネ科（40ミクロン以上）
255・キンポウゲ科
262・ウダ属
263・アブラナ科
269・ナデシコ科
270・アカザ科−ヒユ科
276・ソバ属
279・ウナギツカミ節−サナエタデ節
298・セリ科
312・アリノトウグサ科
322・オミナエシ属
347・キク亜科
349・ヨモギ属
350・タンポポ亜科
85%
92%
89%
99%
10%
+ < 0.5%
0
100%
木本（針葉樹）
木本（広葉樹）
草本・藤本
胞子
a
b
花粉亜帯
I
花粉帯

図２　花粉ダイアグラム

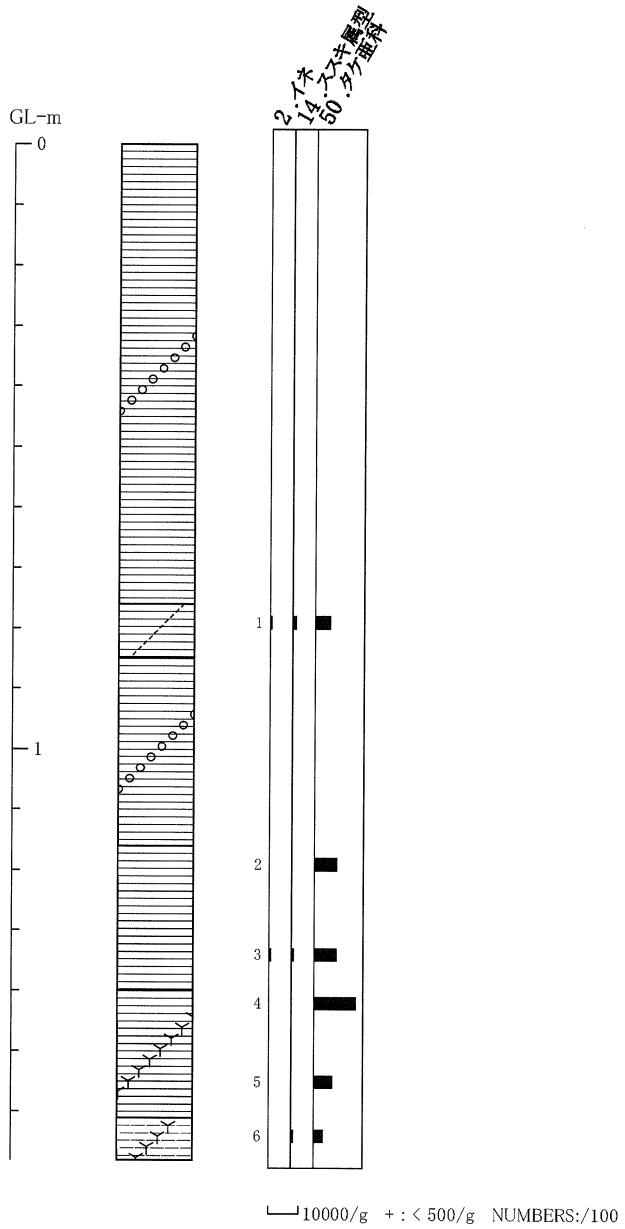


図3　プラント・オパールダイアグラム

表1　微化石概査結果

試料No.	花　粉	炭	植物片	珪　藻	火山ガラス	プラント・オパール
1	◎	○	○	◎	△	◎
2	◎	○	○	○	△	○
3	◎	○	○	△	△	◎
4	△×	◎	△×	△	△	◎
5	△×	◎	△×	○	△	◎
6	△	◎	△×	○	△	◎

凡例　◎　：十分な数量が検出できる
　　○　：少ないが検出できる
　　△　：非常に少ない
　　△×　：極めてまれに検出できる
　　×　：検出できない

写真図版

八斗蒔Ⅰ遺跡全景（南東より）

調査前全景
（北東より）

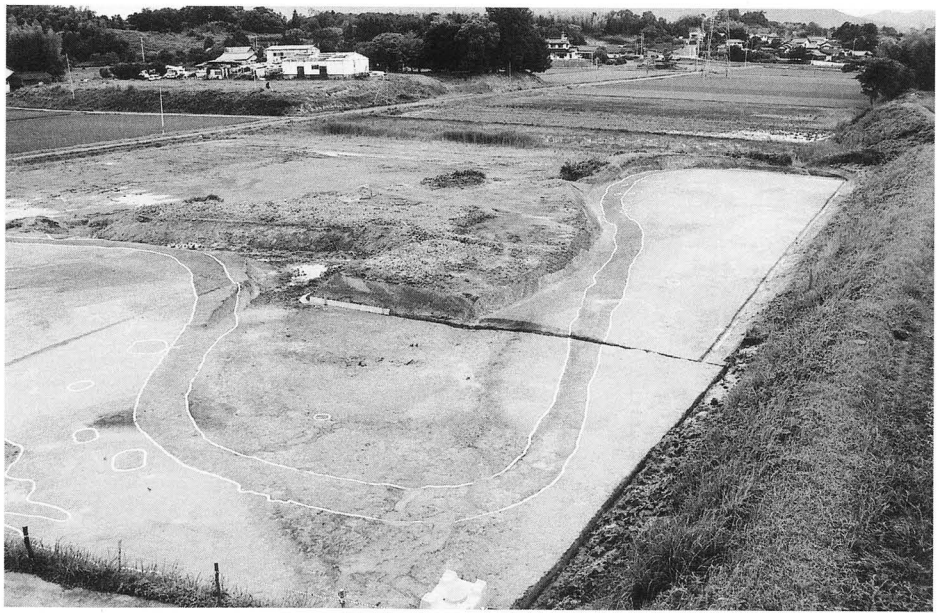
調査前近景
（東より）

試掘第１トレンチ
（北東より）

図版２

試掘第２トレンチ
（南東より）

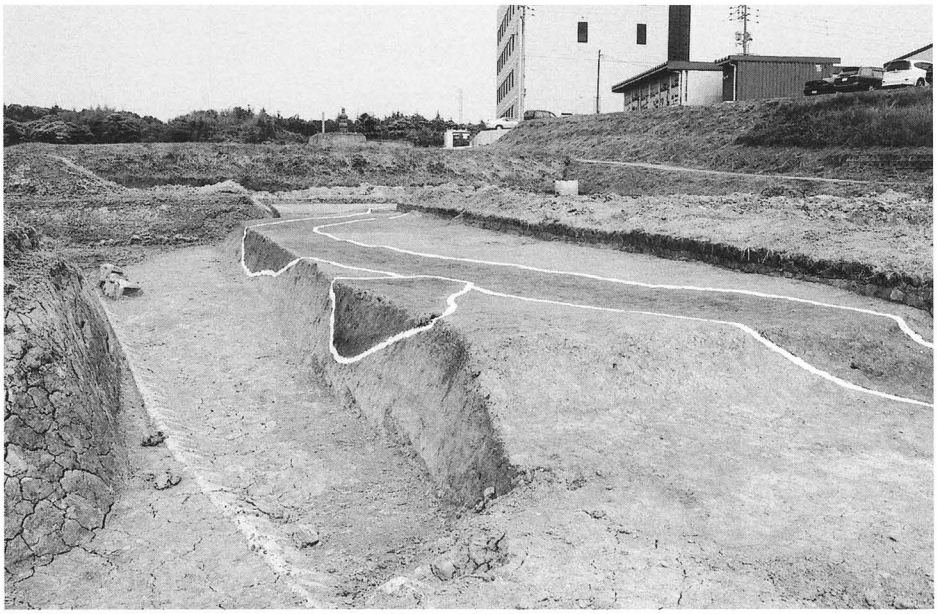
試掘第３トレンチ
（北より）



第１トレンチ本調査遺構
検出状況（南より）

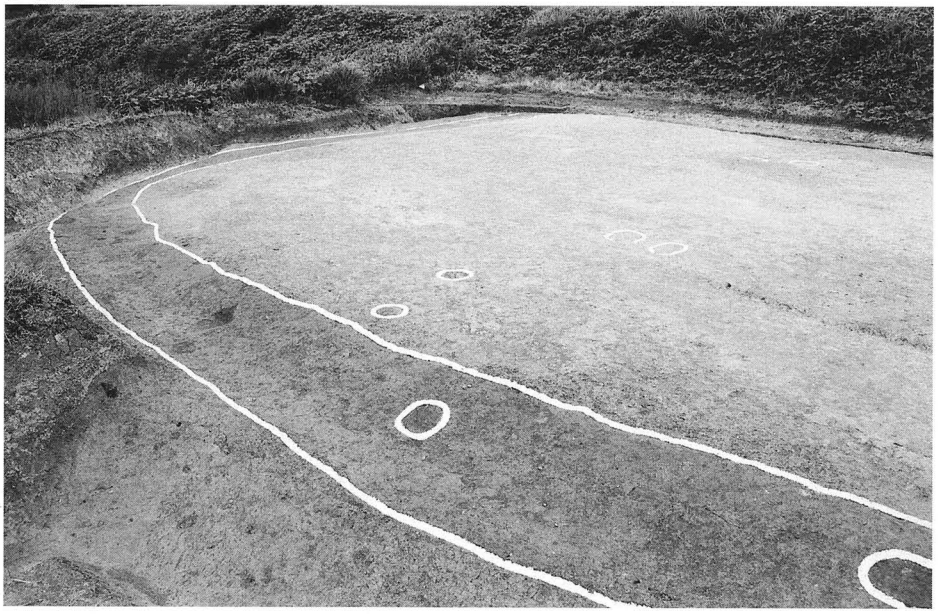
第１トレンチ本調査
SD01検出状況(1)

SD01検出状況(2)

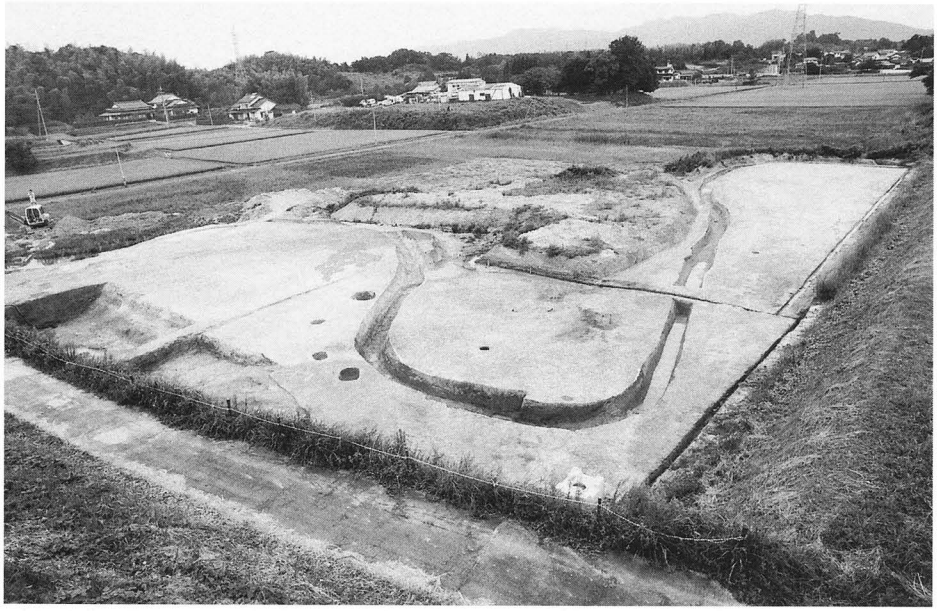


SD01検出状況(3)

図版 4

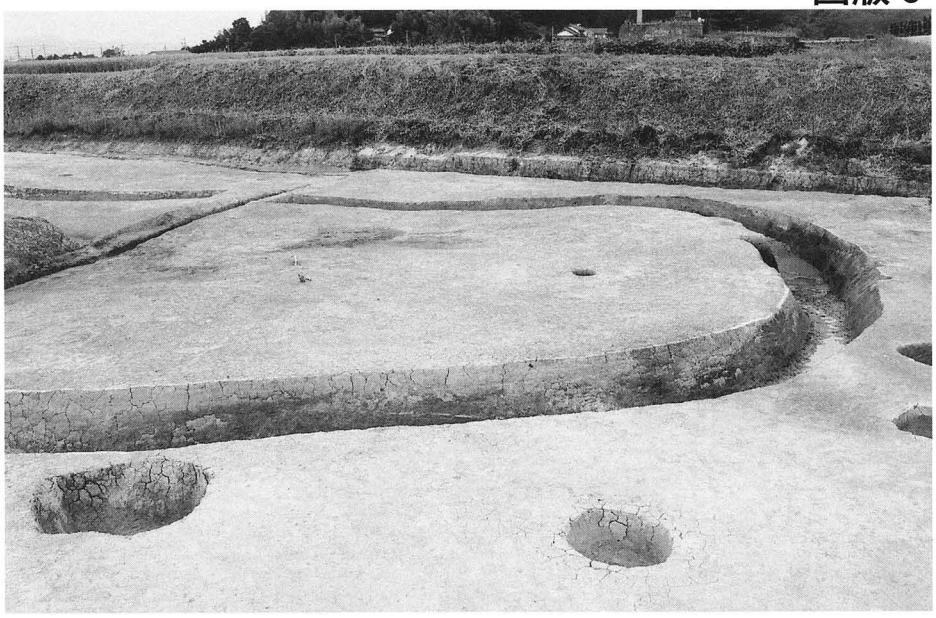


SD01検出状況(4)

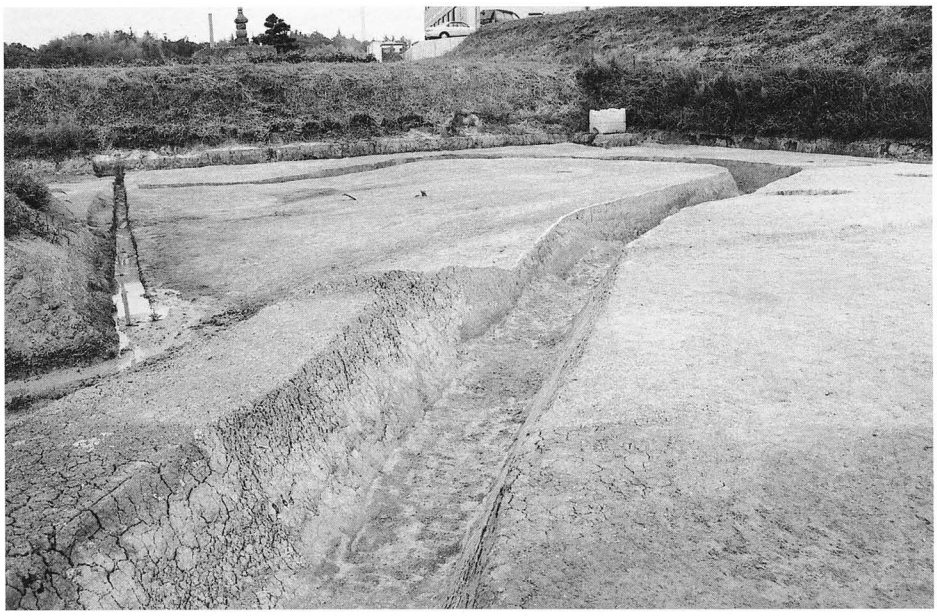


第１トレンチ本調査完掘
状況
（南より）

第１トレンチ本調査
SD01完掘状況(1)



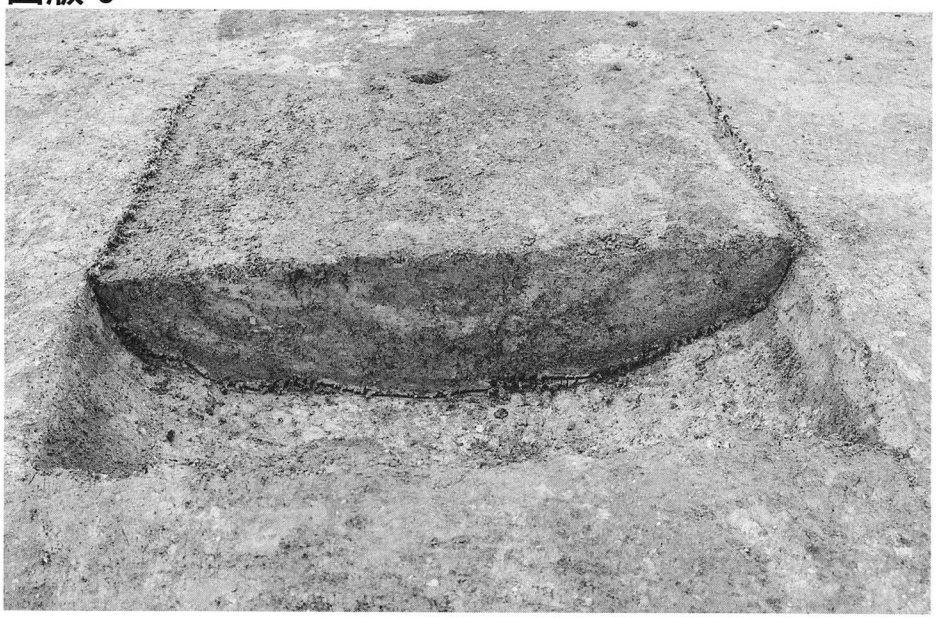
SD01完掘状況(2)



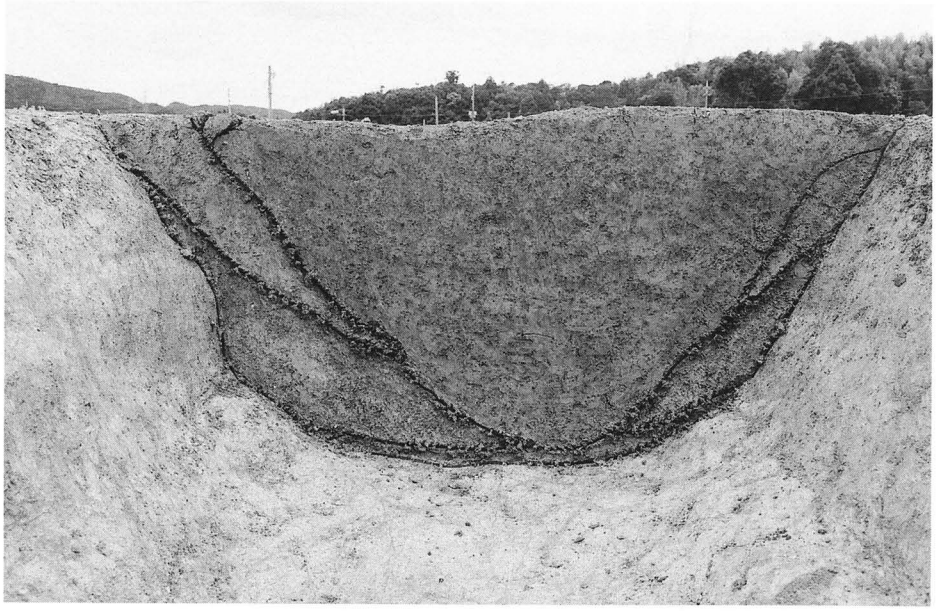
SD01完掘状況(3)

SD01完掘状況(4)

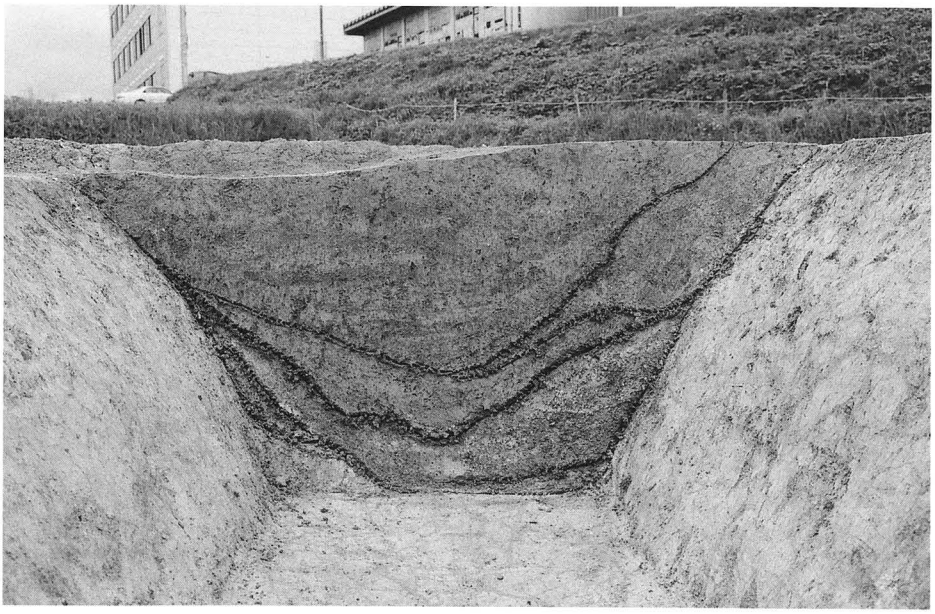
図版 6



第１トレンチ本調査
SD01第１断面

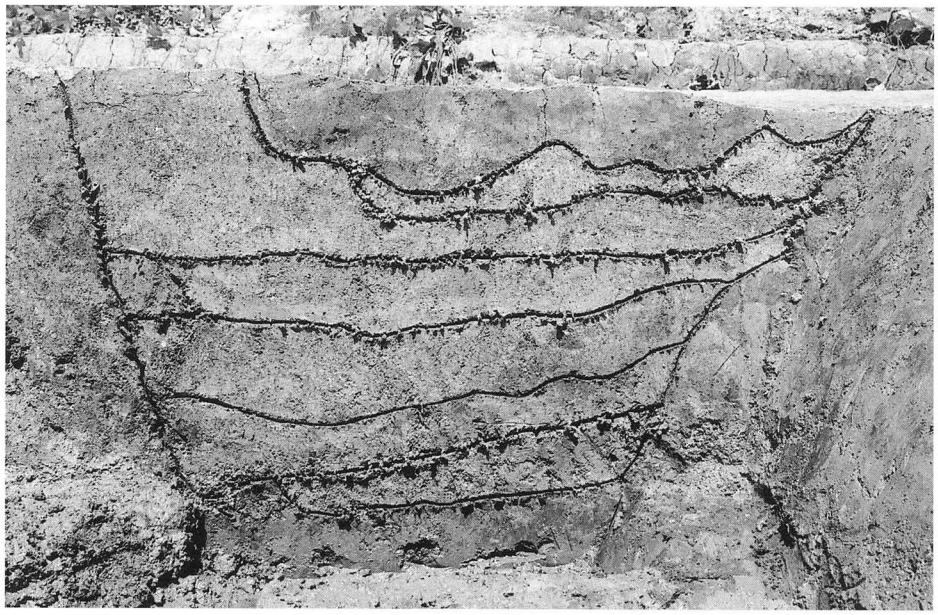


SD01第２断面

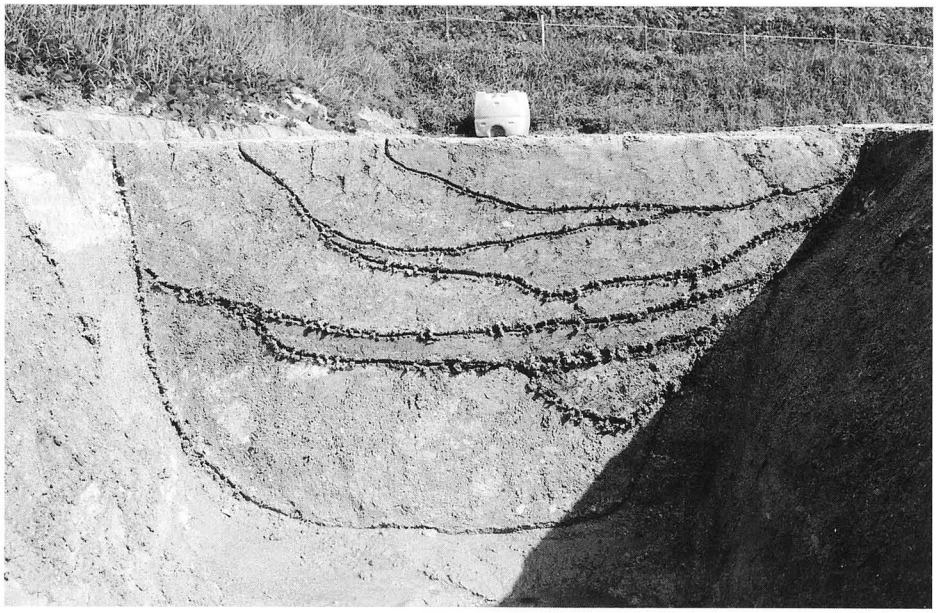


SD01第３断面

SD01第４断面

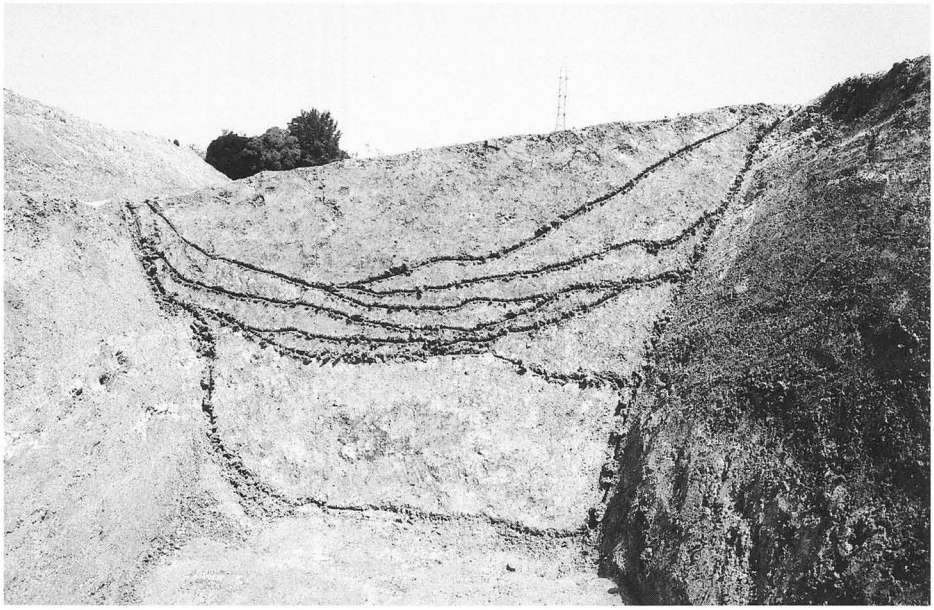


SD01第５断面



SD01第６断面

図版 8



SD01第７断面

SD01第８断面

SD01第９断面

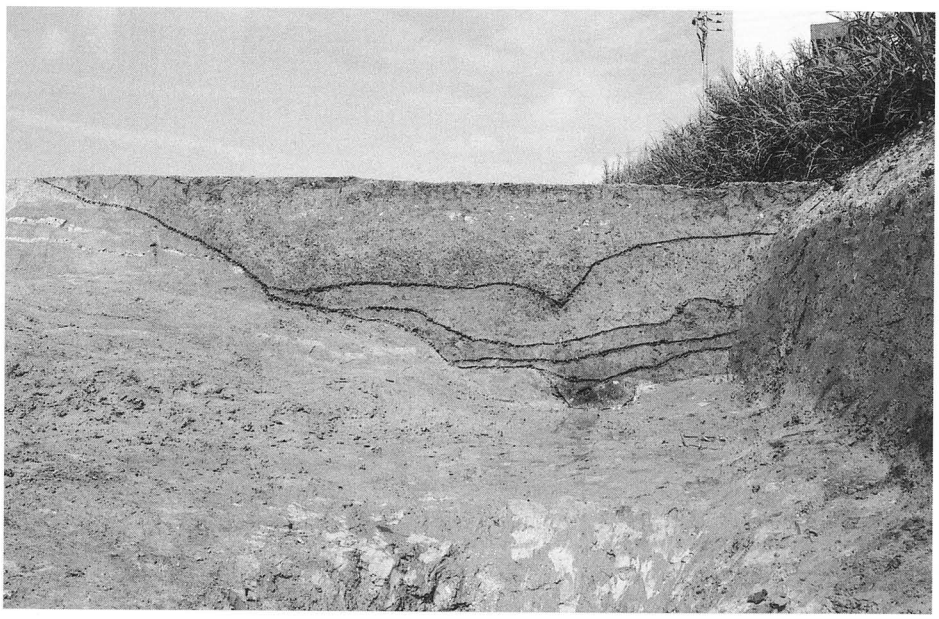
第１トレンチ本調査
SD02検出状況（南より）

第１トレンチ本調査
SD02完掘状況（南より）

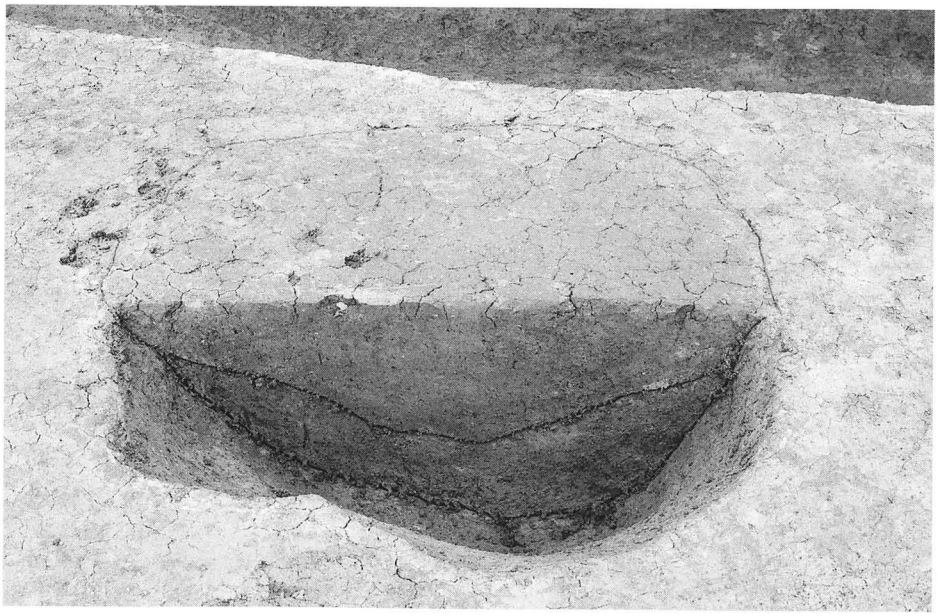
第１トレンチ本調査
SD02第１セクション断面(1)

図版10

SD02第１セクション断面(2)



SD02第２セクション断面



第１トレンチ本調査
SK01断面